宮古市埋蔵文化財調査報告書35

大付（おおづけ）遺跡

—平成3年度発掘調査報告書—

1992.3

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書35
A Report on the Archaeological Research
in Miyako City, No.35

大付遺跡

—平成3年度発掘調査報告書—

1992.3
岩手県宮古市教育委員会
The Miyako Board of Education
Miyako, Iwate, Japan

序　　文

宮古市教育委員会では、毎年、各種開発事業に先だつ遺跡の発掘調査並びに国庫補助・県費補助を導入した崎山貝塚の範囲確認調査を行なっています。そして、その成果は、文化財資料展であります「ふるさとの歴史展」や広報に連載しております「ふるさとの博物館」などに生かされているものと思います。そして、この様な活用を伴ってこそ、長らく守り伝えられて来た文化財の正しい理解と保護の一助となると考えられます。

しかしながら、遺跡の発掘調査がなされ数多くの新たな発見がされることと同時に貴重な遺跡が失われていくのも事実です。この相反する二面性を冷静にとらえていくことも、これからは必要となっていくものと思っております。

さて、本書は、明治時代より知られている大付遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものでございます。当遺跡に関しましては、今まで様々な調査がなされており今回の調査で、調査年次としましては第７次となります。本書においては、過去に行なわれた調査成果も簡単にとりまとめており、現時点における大付遺跡についての発掘調査の実績がある程度わかるものとなっています。

今回の調査は、大付遺跡の範囲内でも西側部分にあたり、市道大付日出島線の改良拡幅工事に先だち実施したものです。その結果、縄文時代の竪穴住居跡や土壙跡などが発見されました。

本書が、広く一般の方々にも活用され、埋蔵文化財保護のために少しでも役立てれば幸いと思っております。

最後になりましたが、発掘調査から本書刊行にあたり指導・協力を賜りました関係各位に対し、心より感謝申し上げる次第です。

平成４年３月

宮古市教育委員会

教育長　佐　藤　勇　逸

例　　言

1　本書は、平成３年（1991）度に実施した大付（おおづけ）遺跡の緊急発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、宮古市建設課の依頼を受けて宮古市教育委員会（教育長　佐藤勇逸）が主体となって実施した。発掘調査及び本書の執筆、編集は鎌田が担当し、高橋、阿部がこれを補佐した。

3　遺構の平面位置は、平面直角座標第Ｘ系を座標交換したもので表示した。その座標は局地的な座標系であるためＲを冠している。

座標軸方向　　第Ｘ系に準じる

調査座標原点　　Ｘ＝－35800.000　Ｙ＝＋97000.000

4　高さは、標高値をそのまま使用した。

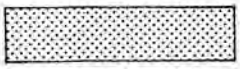
5　土層観察に際しては、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄　1967）を参考とした。

6　遺構・遺物の表現については、次の通りとした。

焼　　土

胎土中に植物繊維含む土器

石（断面）


敲打磨石類の機能面

6　発掘調査及び本書の作成にあたり、次の方々よりご教示・ご指導をいただいた。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

岩手県教育委員会文化課	相原　康二	岩手県埋蔵文化財センター	小田野哲憲
〃	高橋　信雄	宮古市教育委員会市史編さん室	岸　　昌一
〃	熊谷　常正	〃	竹下　将男
岩手県立博物館	佐々木清文	宮古市文化財保護審議委員	斎藤　英樹
〃	佐藤　嘉則		

7　本文中の引用文献は次のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1979　　『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』小田野哲憲・熊谷　常正→『大付報文79』

1983～86　『宮古市遺跡分布調査報告書　１～４』武田将男→『分布調査１～４』

1987～91　『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅴ　昭和61年度発掘調査概報～平成２年度発掘調査概報』
高橋憲太郎→『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅴ』

1989　　『トロノ木Ⅰ遺跡第１次～第７次発掘調査報告書』高橋憲太郎→『トロノ木Ⅰ』

1981　　『宮古市史　漁業・交易編』→『市史　漁業・交易』

目　　次

序　文
例　言
目　次
Ⅰ　調査経過
1　調査に至る経過……1
2　調査要旨……1
3　調査体制……2
Ⅱ　遺跡をとりまく環境
1　大付遺跡の位置と立地……4
2　大付遺跡と周辺の遺跡……8
3　大付遺跡について……9
4　大付遺跡第１次～第６次調査について……10
5　分布調査について……19
Ⅲ　調査内容
1　調査状況……37
2　検出した遺構・遺物……37
Ⅳ　調査のまとめ
1　検出した遺構について……59
2　検出した遺物について……59
3　調査のまとめ……60

挿 図 目 次

第１図　位置図……3
第２図　大付遺跡と周辺の遺跡……5
第３図　地形分類図……6
第４図　大付遺跡周辺地形図……7
第５図　大付遺跡調査地点図……13
第６図　第１次調査平面図と人骨出出状況図……14
第７図　第１次調査竪穴住居跡及び出土遺物……15
第８図　第１次、２次調査出土土器図……16
第９図　大付遺跡出土遺物（『分布調査１』）……19
第10図　大付遺跡出土遺物（『分布調査１』）……20
第11図　第４次調査全体図……23
第12図　第４次調査遺物……24
第13図　第５次調査全体図……25
第14図　第５次調査遺物……26
第15図　白石遺跡昭和63年度調査区……29
第16図　第６次調査全体図……33
第17図　第６次調査土壙図と遺物図……34
第18図　調査区配置図……38
第19図　調査区全体図……39、40
第20図　Ｄトレンチ断面……42
第21図　第１号竪穴住居跡、第１号～３号土壙跡……43
第22図　第１号竪穴跡、第４号土壙跡……44
第23図　第５号、６号土壙跡……45
第24図　Ｄトレンチ西側小ピット群……46
第25図　Ｄトレンチ東側小ピット群……47
第26図　第２号竪穴跡……49
第27図　出土遺物（土器）……50
第28図　出土遺物（石器）①……51
第29図　出土遺物（石器）②……52
第30図　出土遺物（石器）③……53
第31図　扁平円礫図……55
第32図　大付第６次調査扁平円礫……57
第33図　大付第７次調査扁平円礫……58

付　表　目　次

第１表　崎山遺跡群内発掘調査一覧表（平成１年～３年）……8
第２表　小ピット群計測値一覧表……48
第３表　出土石器計測値一覧表……54
第４表　大付第７次調査扁平円礫計測値一覧表……56

写　真　図　版　目　次

（本文中）

大付遺跡第１次・第２次調査（『大付報文79』より）①……17
〃　〃　〃　②……18
大付遺跡出土骨角器－中嶋コレクション－（『分布調査１』より）……21
〃　〃　（『宮古市史－漁業・交易編』より）……22
〃　第５次調査区遺構検出状況……27
〃　〃　（第１号、２号、３号土壙跡）……28
白石遺跡　昭和63年度調査区①……30
〃　〃　②……31
〃　〃　③……32
大付遺跡第６次調査区（景観）、（遺構検出状況）……35
〃　〃　（遺構検出状況）、（第１号土壙跡）……36

（巻末）

第１図版　崎山遺跡群（空中写真）
第２図版　第７次調査区①、同左②
第３図版　〃　③　〃④
第４図版　第１号竪穴住居跡（土層断面）①、同上②
第５図版　第５号土壙跡（完掘）、第４号土壙跡と第１号竪穴跡（土層断面）
第６図版　調査区Ａトレンチ遺構検出状況、第１号竪穴住居跡（完掘）
第７図版　〃　Ｄトレンチ（第２号竪穴跡検出状況）、同左（完掘）
第８図版　出土土器（第27図）①、同左②
第９図版　出土土器（第27図）③、出土石器（第28図１、２　第30図20、21）
第10図版　出土土器（第28図３～８）　出土石器（第28図９～14）
第11図版　出土石器（第28図15、16、第30図17、18）

Ⅰ　調査経過

1　調査に至る経過

宮古市では、昭和57年度（1982）より４ヶ年にわたり市内の遺跡詳細分布調査を実施し、その成果として『分布調査１～４』及び遺跡台帳としての『分布図86』を刊行している。さらに、その後の文化財パトロール事業などにより、新らたに発見された遺跡もあり、現在では、市管内で443ヶ所もの遺跡の存在が確認されている。

『分布図86』

443ヶ所

大付遺跡は、宮古市の遺跡コードＬＧ14－2291、岩手県の遺跡コードＬＧ04－2291として登録されている周知の遺跡である。当遺跡は、明治時代よりその存在が知られているもので縄文時代の貝塚遺跡として広く紹介されている。昭和54年（1979）１月には、縄文時代晩期の屈葬人骨１体が発掘調査されている。なお、この人骨は、現在岩手県立博物館において常設展示されている。

貝塚遺跡

今回の調査は、第７次調査（昭和53年（1978）の発掘調査から数えて）となるもので、中生代白亜紀の化石を豊富に産出する（註）ことで有名な日出島漁港に至る、市道崎山大付線改良拡幅工事に先だち宮古市建設課との事前協議を経て、平成３年度に予算措置を施した建設課の依頼を受け宮古市教育委員会が、調査主体となって実施したものである。

（註）宮古市教育委員会では平成２年度から５ヶ年計画で日出島から産出した化石群の実態を把握する「宮古層群日出島産出化石調査事業」を実施し、各年度毎に年報を刊行し最終年度を目安として図録集（普及版）を刊行することとしている。

2　調査要旨

調査地点　宮古市崎鍬ヶ崎第13地割字白石９－３、９－３－１、９－３－ロ、９－３－ホ、９－６、９－７、９－12、９－13、90、
〃　〃　第14地割字萩沢１、10、11－１、11－２、13、23－１、24－１、24－４、24－５、24－７、24－８、24－９、24－10、24－11、24－15、24－16、24－21

調査原因　市道崎山大付線改良拡幅工事に先だつ緊急発掘調査

調査期間　＜野外調査期間＞　平成３年８月１日～平成３年10月12日
＜室内作業期間＞　平成３年11月１日～平成４年３月31日

調査面積　1279㎡

検出遺構　調査対象区域が現道からの拡幅部分に留まったため、調査区の幅が約２～３ｍ前後と狭く、また、表土が薄かったり現道工事による攪乱があることなどから遺構の全容を把握できないものもあったが、検出した遺構は次の通りである。

①縄文時代の竪穴住居跡及び竪穴跡（通常、住居跡に伴う炉跡や柱穴跡などの施設の存在を確認できず全容をつかめないことなどから、竪穴住居跡と判断せず

竪穴住居跡

堅穴跡としたものである。）

②縄文時代の土壙跡

③時期不明の堅穴跡。同じく柱穴状の小ピット群（これらの中には攪乱による小ピットも含まれているものと考えられる）。

検出遺物　縄文時代中期を中心とした土器・礫石器などの石器類のほか近世以降と考えられる陶磁器片や鉄銭などが出土している。

3　調査体制

発掘調査の体制は、次の通りである。

調査の主体	宮古市教育委員会（教育長　佐藤勇逸）	
調査の総括	宮古市教育委員会社会教育課長	大森　　翼
事務の総括	宮古市教育委員会社会教育係長	山崎　吉章
事務担当者	宮古市教育委員会社会教育課主任	坂下　　昇
〃	宮古市建設課庶務係主任	箱石　憲一
〃	宮古市建設課庶務係主任	山口　暁子
調査担当者	宮古市教育委員会社会教育課主事	高橋憲太郎
〃	宮古市教育委員会社会教育課主事	鎌田　祐二（主担当）
〃	宮古市教育委員会埋蔵文化財調査員	阿部　　豊

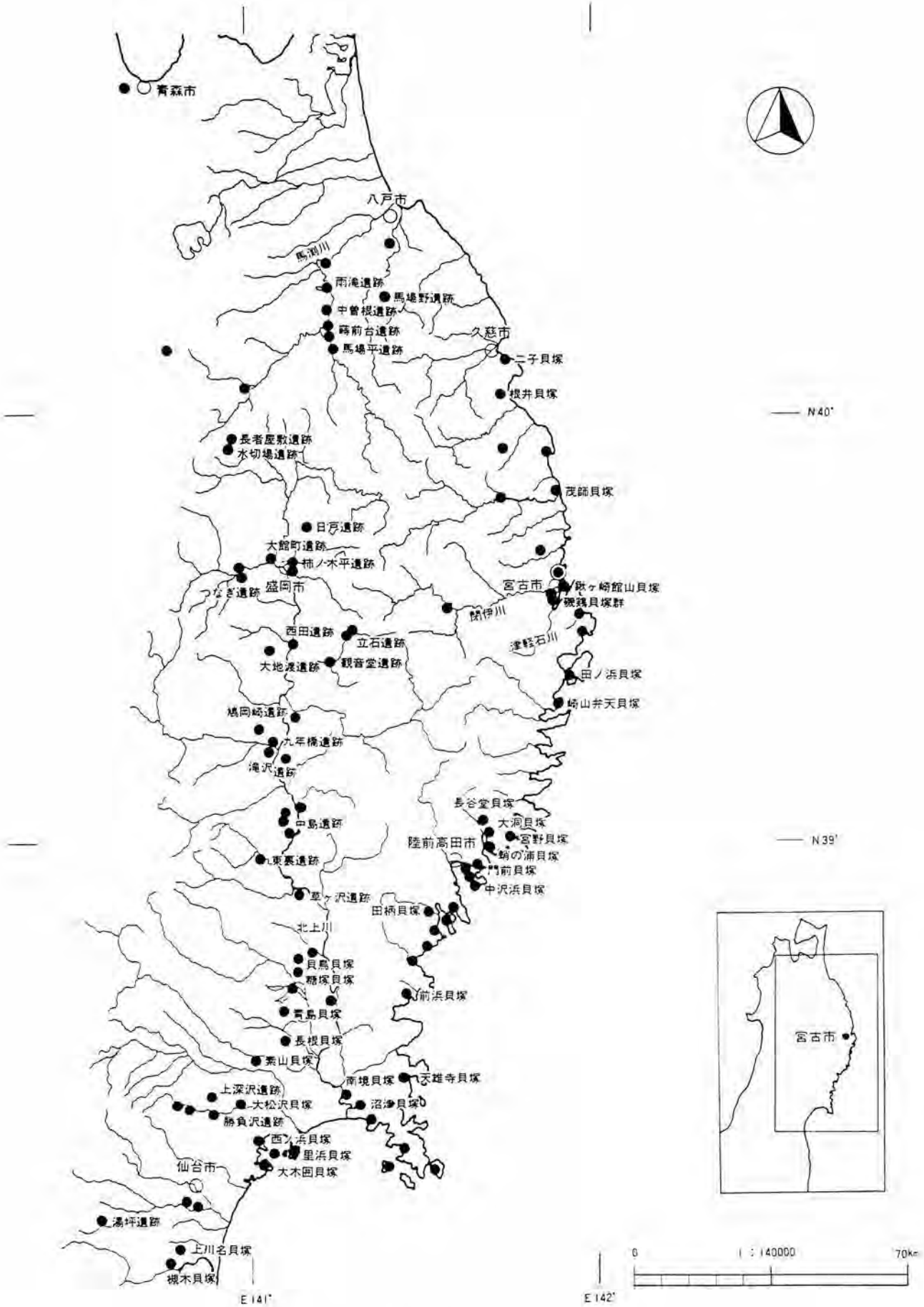
調査にあたっては、次の各位より多大な協力をいただいた。（敬称略、順不同）

《発掘調査》　古館友三、木村博、佐々木清、今津東一、刈屋昭三、舘崎禮子、大越貞蔵、吉田昭、斎藤貞子、藤谷晶子、菅原テルミ、菊池清八、佐々木茂、前川友宏、北村忠治、神林信吉、山野目崇子、笹川美穂子、竹原昌江、小野寺青治郎、阿部亮子

《整理作業》　大須賀ゆみ子、古館友三、菅原洋子、久保田加代子、佐々木茂、阿部亮子、阿部ハルコ

《地権者》　前川敏、佐々木孫四郎、竹谷紀幸、山内鶴太郎、佐々木征一、山下永太郎、佐々木榮、山崎長平、山内敏範、前川ミエ子、前川牧子、千代川良兵衛、山内由太郎、臼木狗

また、発掘調査に際しては、施工業者である馬場建設の皆様方からのご協力を得た。地権者のひとりである前川敏氏宅からは水や休憩場を拝借するなどのご支援を得た。


青森市
八戸市
馬淵川
雨滝遺跡
馬場野遺跡
中曽根遺跡
蒔前台遺跡
馬場平遺跡
久慈市
二子貝塚
根井貝塚
N40°
長者屋敷遺跡
水切場遺跡
茂師貝塚
日戸遺跡
大館町遺跡
柿ノ木平遺跡
盛岡市
つなぎ遺跡
宮古市
獺ヶ崎館山貝塚
鵜鳥貝塚群
閉伊川
津軽石川
西田遺跡
立石遺跡
大地渡遺跡
観音堂遺跡
田ノ浜貝塚
崎山井天貝塚
鳩岡崎遺跡
九年橋遺跡
滝沢遺跡
長谷堂貝塚
大洞貝塚
宮野貝塚
陸前高田市
鮪の浦貝塚
門前貝塚
中沢浜貝塚
N39°
中島遺跡
東裏遺跡
草ヶ沢遺跡
田柄貝塚
北上川
貝鳥貝塚
糠塚貝塚
前浜貝塚
青島貝塚
長根貝塚
素山貝塚
南境貝塚
天雄寺貝塚
上深沢遺跡
大松沢貝塚
沼渟貝塚
勝負沢遺跡
西ノ浜貝塚
里浜貝塚
仙台市
大木囲貝塚
湯坪遺跡
上川名貝塚
槻木貝塚
E141°
E142°
宮古市
0
1：140000
70km

第1図　位置図

Ⅱ　遺跡をとりまく環境

1　大付遺跡の位置と立地

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央部に位置している。北緯39°29′43″～39°43′23″、東経141°45′20″～142°04′44″までの総面積338.47㎢を市域とし、市内重茂半島蛇ケ崎は、本州最東端にあたる。宮古市の北側は田老町、岩泉町、西側は新里村、南側は山田町と隣接し、東側には広大な太平洋がひろがり、海岸線は景勝地として有名な陸中海岸国立公園となっている。この海岸線は、宮古市付近を境に南部と北部でその様相を異にしている。南部は、出入りの激しいリアス式海岸、北部は、比較的出入りの少ない直線的で所々に高さ100mを越す海食崖がみられる。

大付遺跡

大付遺跡は、宮古市街地の北効、崎山地区の東端部にあり、太平洋を望む地に位置し宮古湾越しには重茂半島が眺望できる。遺跡全体は、標高100～80m前後のゆるやかな斜面上にあり、海岸線近くで急激に落ち込んでいる。付近の海岸線も北部から続く直線的な景観を呈している。遺跡東端の海岸部には、中生代白亜紀の化石を産出することで知られる宮古層群発祥の地である日出島海岸が所在し、当遺跡のほぼ中央部を南北に分断する様に東西方向へ通り日出島漁港に至る道路が市道崎山大付線である。

北上山地

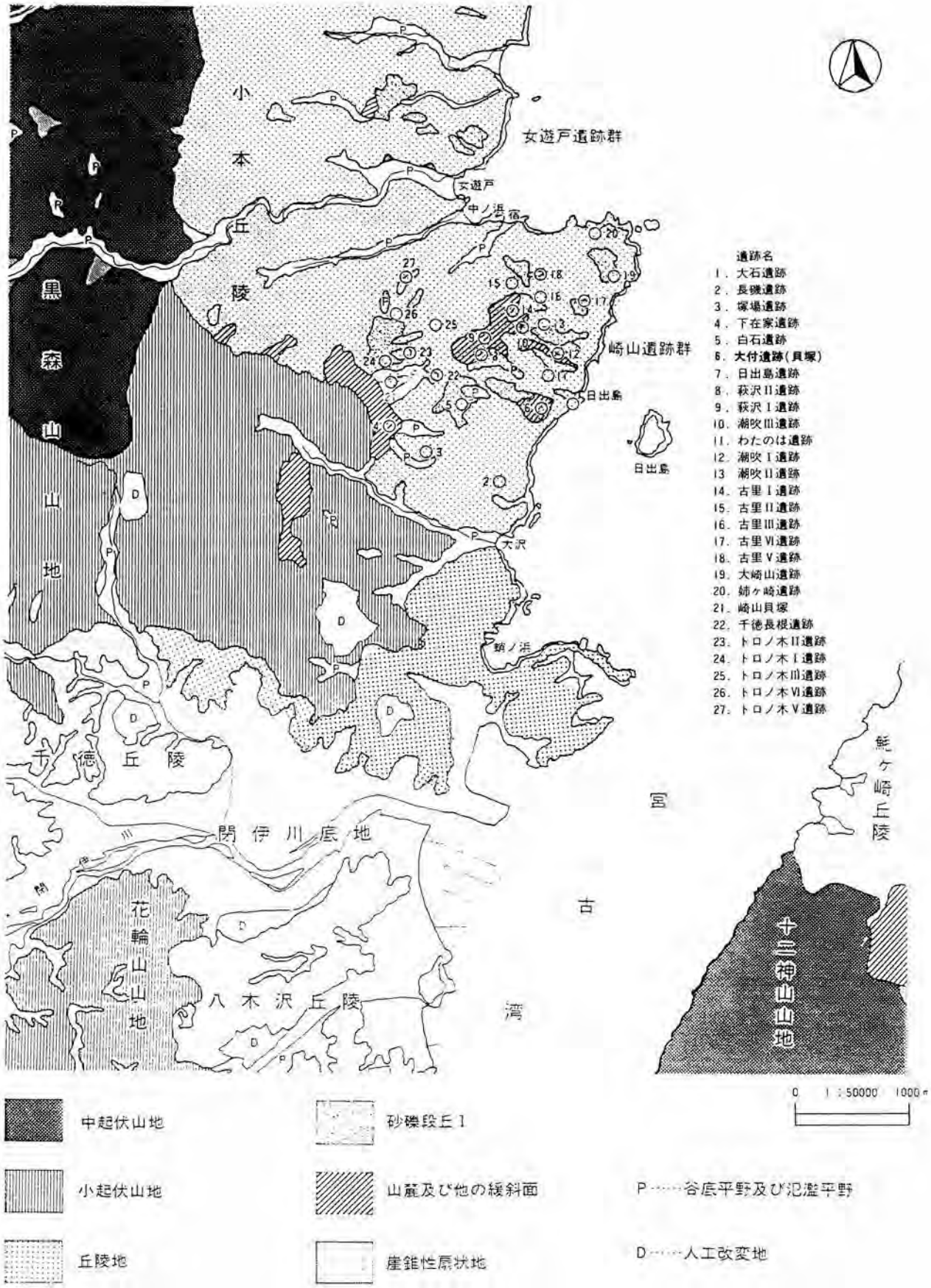
宮古市は、地形的には、標高1991mの早池峰山を最高峰とする北上山地の東縁部にあたり、その山系が海岸線近くまでに迫っているため平坦部が少ない。市内には、宮古市を北と南に大きく分断する閉伊川と重茂半島との断層帯に注ぐ津軽石川の2大河川があり、このふたつの川とそれらに注ぐ支流沿いには、面積的には狭いながら河岸段丘及び沖積地が広がる。そして、これらを取り囲む様に北上山地から続く山地帯の縁辺部に丘陵帯が形成されており、市内のほとんどの遺跡は、この様な丘陵上に立地しているものである。

崎山地区

当遺跡を含む崎山地区には、北から続く小本丘陵と呼ばれている海岸段丘が開折されて発達した丘陵上に在る。この崎山地区には、目だった大きな河川は皆無で、そのため河岸段丘や沖積地は、ほとんど見あたらない。小本丘陵も含め市内の丘陵帯は、小河川や沢筋などによる浸食が著しく開折の度合が高く、樹枝状の平面形態を呈している。従って、大半の遺跡は、狭い尾根や緩斜面上に立地しているもので面積的にも大規模な遺跡は少ないが、逆に中小規模な遺跡が連続的な分布状況が認められ遺跡群を形成している。当遺跡も西から東へゆるやかに傾斜する緩斜面上に立地しており、崎山遺跡群を構成するひとつの遺跡である。当遺跡の南と北は深い谷で、西側も谷筋で微地形的には周囲の遺跡と区切られている。

地質的にみてみると、宮古市中心部には中生代に貫入した花崗岩類（宮古花崗岩体）が基盤をなしているが、当遺跡を含む崎山地区では、砂岩や安山岩質岩石類を中心とする中生代白亜紀の層（原地山層）、及びこれらに貫入した花崗岩類（田老花崗岩体）が基盤となっている。この小本丘陵の段丘面の保存状態は極めて悪く基盤岩が露出している所も多く、基盤岩が風化した砕屑物が認められるものである。

第２図　大付遺跡と周辺の遺跡


小本丘陵
黒森山山地
女遊戸遺跡群
女遊戸
中ノ浜宿
崎山遺跡群
日出島
大沢
鵜ノ浜
千徳丘陵
閉伊川底地
花輪山山地
八木沢丘陵
宮古湾
鮫ヶ崎丘陵
十三神山山地
遺跡名
1. 大石遺跡
2. 長磯遺跡
3. 塚場遺跡
4. 下在家遺跡
5. 白石遺跡
6. 大付遺跡(貝塚)
7. 日出島遺跡
8. 萩沢II遺跡
9. 萩沢I遺跡
10. 潮吹III遺跡
11. わたのは遺跡
12. 潮吹I遺跡
13. 潮吹II遺跡
14. 古里I遺跡
15. 古里II遺跡
16. 古里III遺跡
17. 古里VI遺跡
18. 古里V遺跡
19. 大崎山遺跡
20. 姉ヶ崎遺跡
21. 崎山貝塚
22. 千徳長根遺跡
23. トロノ木II遺跡
24. トロノ木I遺跡
25. トロノ木III遺跡
26. トロノ木VI遺跡
27. トロノ木V遺跡
0 1:50000 1000m
中起伏山地
小起伏山地
丘陵地
砂礫段丘I
山麓及び他の緩斜面
崖錐性扇状地
P……谷底平野及び氾濫平野
D……人工改変地

第3図　地形分類図

第４図　大付遺跡周辺地形図

2　大付遺跡と周辺の遺跡

既に記した通り、宮古市内では443ヶ所もの遺跡が確認されている。それらの遺跡について大略的にみてみると、閉伊川・津軽石川の２大河川及びその支流沿いでは、奈良・平安時代の古代から中世にかけての遺跡が多く、反対に大河川がみられない崎山や重茂地区では、古代の遺跡はほとんど立地せず縄文時代の遺跡が主体を占めている傾向が窺える。これは、多分に地形的な要因に基づく生業形態の違いによるものと考えられる。（『分布調査１～４』、『分布図86』などを参照）

分布調査

さて、大付遺跡は、市内北効の三角形状に突き出た崎山地区の東側、海岸部に位置する。この崎山地区では28ヶ所の遺跡が確認されており、崎山遺跡群として把握されている。崎山遺跡群は西側の館ヶ森（標高248m）を最高点とする山地帯で高度的には明瞭に区切れており、その山地帯の裾から標高約150～80mで海岸部に向かってゆるやかに傾斜している。

崎山遺跡群内には縄文時代早期～晩期を主体とした遺跡が存在するが、その各々については、『分布調査１～４』、『分布図86』、『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅴ』、『トロノ木Ⅰ』など既刊の報告書などで広く詳しく紹介されている。

崎山遺跡群

崎山地区では、近年、宅地造成工事などに先だつ緊急発掘調査の件数も増加の一途をたどっており、また、国庫補助・県費補助を導入して行なっている崎山貝塚の範囲確認調査も昭和61年（1986）度から継続的に実施している。『トロノ木Ⅰ』には、この様な状況を崎山遺跡群内発掘調査一覧表を掲載しているが、ここでは、それ以降（平成元年～平成４年度まで）のものをまとめて一覧表を載せる。（大付遺跡については重複掲載）

No.	遺跡名	調査時期	調査者（担当者）	調査原因	調　査　成　果	報告書等
1	大付遺跡	明43年頃	中嶋吉兵衛	学術調査	貝層、骨角器等	『先史遺物帖』（未刊）
2	〃	大13年	柴田常恵・小田島禄郎	確認調査	貝層等	岩手日報連載記事等
3	〃　１次	昭53年	小田野哲憲・熊谷常正	個人住宅	屈葬人骨、竪穴住居跡（晩期）	『大付報文　79』
4	〃　２次	昭54年	〃	範囲確認調査	遺物包含層（後～晩期）等	〃
5	〃　３次	昭60年	武田将男・高橋憲太郎	個人住宅	フラスコピット（中期）等、３次調査とする	（未）
6	〃　５次	昭63年	高橋憲太郎	個人住宅	土壙跡等（晩期）、５次調査と変更	『崎山遺跡群Ⅲ』
13	（白石遺跡　１次）	昭61年	〃	個人住宅	小土壙跡、包含層（前期）、大付４次と変更	『崎山遺跡Ⅰ』
29	下在家Ⅰ遺跡（試）	平１年	鎌田祐二	宅地造成	遺構無し	（未）
30	下在家Ⅱ遺跡（試）	平１年	高橋憲太郎	工場用地造成	遺構無し	（未）
31	下在家Ⅲ遺跡（試）	平３年	鶴田　均	宅地造成	遺構無し	（未）
32	トロノ木Ⅳ遺跡	平１年	鎌田祐二	宅地造成	遺構無し	（未）
33	白石遺跡　３次	平１年	高橋憲太郎	個人住宅	竪穴住居跡７棟（中期）、土壙跡４基等	『崎山遺跡群Ⅳ』
34	〃　４次	平１年	〃	倉庫建築等	竪穴住居跡７棟（中期末～後期初頭）等	『崎山遺跡群Ⅳ』
35	〃　５次	平２年	〃	倉庫建築等	竪穴住居跡６棟（中期末～後期初頭）	『崎山遺跡群Ⅴ』
36	崎山貝塚　４次	平１年	〃	範囲確認調査	竪穴住居跡、土壙跡等	『崎山遺跡群Ⅳ』
37	〃　５次	平２年	〃	範囲確認調査	中央広場を囲む地山の落込み、自然遺物包含層	『崎山遺跡群Ⅴ』
38	〃　６次	平３年	〃	個人住宅	竪穴住居跡３棟（中期）等	『崎山遺跡群Ⅵ』
39	〃　７次	平３年	〃	範囲確認調査	中央広場と環状の掘り込み、土壙跡等	『崎山遺跡群Ⅵ』
40	大付遺跡　６次	平２年	鎌田祐二	個人住宅	縄文時代土壙跡、小ピット群	『金浜・大付　92』
41	〃　７次	平３年	〃	市道改良工事	縄文時代竪穴住居跡１棟、竪穴跡等	（本書）
42	トロノ木Ⅴ遺跡１次	平２年	〃	宅地造成	縄文時代土壙跡等	（未）
43	古里Ⅴ遺跡（試）	平２年	鶴田　均	宅地造成	遺構無し	（未）
44	トロノ木Ⅳ遺跡（試）	平２年	〃	宅地造成	遺構無し	（未）
45	大石遺跡（試）	平３年	〃	宅地造成	遺構無し	（未）

第１表　崎山遺跡群内発掘調査一覧表（平成１年～３年）

3　大付遺跡について

大付遺跡も含めた宮古地方の貝塚の調査は、明治の後半から大正年間にかけて散発的に行なわれていた。これは、当時の人類学・考古学会が貝塚調査に注目された時期でもあり、一方、地元でも小学校で教鞭をとっていた中嶋吉兵衛が精力的に資料収集に努めていた。(註1)

貝塚

中嶋吉兵衛

明治42年（1909）、43年（1910）、44年（1911）には、当時東京帝国大学農科大学教授であった岸上鎌吉が来宮しており、中嶋とともに鍬ヶ崎館山貝塚の発掘調査を実施している。そして、岸上は、明治44年（1911）には日本の史前漁業史を解明すべく目的をもって執筆した、『Prehistric Fishing in Japan』(註2)を刊行しており、この論文中には、中嶋より提供を受けた鍬ヶ崎館山貝塚と大付貝塚の資料(註3)が掲載されている。しかし、大付貝塚については、図版の掲載はなく資料の存在及び出土動物遺体一覧表に出土物が紹介されているだけである。その内容は、次の通りである。

岸上鎌吉

① "1個以上尾鉤のついている銛頭" の項の中に「…（前略）…最近中嶋氏が、この型の資料を鍬ヶ崎近くの大付貝塚で手に入れた。尾鉤はふたつに分かれ末端部に向かって分岐している。横断面は丸味を帯びている。…（後略）…」とある。(註4)

② 出土動物遺体一覧表では、大付貝塚より出土しているのは次の各種である。

「軟体動物腹足綱　Purpura succidata とツメタガイ　　魚綱硬骨亜綱　スズキ　マダイ　　哺乳綱クジラ目　クジラ・イルカ」

この岸上の論文中では、以上の2点だけの掲載だが、①文中には「…最近…」と有り、これは大付貝塚の発見が正にこの明治44年直前であったことに他ならないと考えられる。

明治末～大正年間にかけては、推測の域を出ないが、中嶋は大付貝塚の発掘を行ない多数の資料を収集したものと思われる。それは、大正11年（1922）に刊行された『下閉伊郡志』の中で中嶋が執筆した「付録・石器時代遺跡考」に「崎山村大附（蝦夷森）　〔貝塚〕　骨角加工品、土器片、石器、灰、木炭」との記述があり、しかも、中嶋が収集した数多くの資料は、現在、子息の中嶋隆氏が保管しており、その一部は『分布調査1』や『宮古市史　漁業・交易』に紹介されている。それらによれば、釣針・銛頭・刺突具類・骨ベラ・貝輪・弭形角製品・蝉を模したと思われる骨角偶などもみられ（本書21頁に記載）、中嶋は、かなりの回数の発掘？を行なったものと推測される。

骨角偶

大正13年（1924）には、当時内務省の考査員であった柴田常恵が岩手県史蹟名勝天然記念物調査会委員であった小田島禄郎の案内で来宮している。当時の新聞記事(註5)によれば、気仙地方の貝塚を調査後、宮古を訪れているが、「…（前略）…殊に柴田氏は此の方面に於ても一、二の指定地を擧げ得度い希望を洩らしている…（後略）…」と有り、指定史跡の候補地を選定するために来宮している。その候補地とは、鍬ヶ崎館山貝塚、磯鶏蝦夷森貝塚、大付貝塚らしいが、結果的には、いずれも指定とはなっていない。大付貝塚に関しては、その理由として次の様に記されている。

柴田常恵

小田島禄郎

「…（前略）…相當の層厚と面積があれば勿論指定候補地として有力なものと期待して行った。（中略）土器片の量は割合に多く殊に人骨などの少なからず散らばって居るよりすれば至って薄層らしく而も大腿骨や脛骨の長大なものまで掘り返されてあるには思わず悲惨とさけばざ

るをえなかった。柴田氏は『大変薄い。結局、發掘も無効だろう』…（後略）…」

結果的には、発掘を試みているが貝層が薄いという点で大付貝塚は指定候補地から見送られている。その発掘地点は、記録に残っていないので不明だが、中嶋の記録などによれば岩手県立博物館が実施した第１次調査のＢ地点付近と考えられる。確かに現況を見ても貝層の分布はほとんど確認できないが、すでに宅地化してしまった所に貝層はあったと考えられる。中嶋の大付貝塚からの多数の収集資料などからも、貝層の存在は確実で今後、大付集落内の家屋改築などに伴う調査の必要性も考慮していかなければと思われる。

この大正13年の記録以後、昭和初期から第１次調査の実施される昭和53年までの間は、目だった動きもなく今日に至っている。

（註１）中嶋の業績については、各書で紹介されているが、岩手県立博物館が昭和61年（1986）に実施した企画展「岩手の貝塚」の解説図録に詳細に紹介されている。

（註２）中嶋は、鍬ヶ崎館山貝塚の発掘調査報告書とも言うべき「先史遺物帖」と題する文献を明治の末年（1912年頃）作成しているが、この中には多数の骨角器や自然遺物、土器などの図版も描かれている。その一部が、『宮古市史漁業・交易』に紹介されている。

（註３）原本は、英文で書かれているため、本書では『岩手県立博物館研究報告』第２号、第３号（1984、85）に収録されている「岸上鎌吉　日本先史時代の漁撈(1)、(2)」（小田野哲憲・川村和子）の詳細な訳本に基づいて引用した。

（註４）註３に同じ

（註５）岩手日報新聞1924（大正13）年11月６日から11月15日に連載した小田島禄郎の「東海岸の史蹟踏査」による。

（註６）柴田らが発掘したと思われる地点は、現在では宅地化している様である。

4　大付遺跡の第１次～第６次調査について

大付遺跡の今までの調査についてまとめてみる。『崎山遺跡群Ⅲ』や『トロノ木Ⅰ』でも、若干まとめているが、調査年次から漏れているものがあったり、また、大付遺跡の範囲をどこまでにするかという問題点も含め整理する。調査年次については、昭和53年（1978）に岩手県立博物館で実施した際、第１次、２次と記しており、これを始まりとする。遺跡の範囲については、東側は海、北と南側は深い谷で区切られているため問題はないが、西側は第４図で示している付近が南側に広がる白石遺跡、北側の萩沢Ⅱ遺跡との境と考えられ、丁度、この付近に谷があり、地形的にも大付集落から続く緩斜面が途切れている。現在は、市道建設による盛土のため一体化している感がある。

遺跡の範囲

以上のことにより、『トロノ木Ⅰ』で記載している一覧表（１頁）のうち白石遺跡第１次は大付遺跡の範囲内となる。また、昭和60年（1985）の調査でも遺構などが検出しているので、これも調査年次の中に入れることとする。大付遺跡の調査年次などについては、今までのものを本書を以って訂正することとする。

なお、本書中には、今まで未報告であった大付遺跡西端部に隣接する白石遺跡の調査（昭和63年（1988）に市道改良工事に伴う試掘調査）の結果についても掲載した（検出遺構なし）。また、昭和60年の調査については、未整理、未報告だが、今回は概略についてのみ記し正式な報告書の刊行を待つこととする。

☆第１次調査

調査地点　宮古市大字崎鍬ヶ崎第15地割８番地９（第５図）

調査原因　個人住宅建築

調査期間　昭和53年（1978）11月16～11月22日

調査面積　300㎡

調査担当　田村忠博（宮古市文化財保護審議会委員）

小田野哲憲・熊谷常正（岩手県立博物館学芸員）

☆第２次調査

調査地点　宮古市大字崎鍬ヶ崎第15地割地内の畑地

調査原因　範囲確認調査

調査期間　昭和54年（1979）１月16日～１月20日

調査面積　65.5㎡（３地点の合計で）

調査担当　小田野哲憲・熊谷常正

第１次・２次調査では、竪穴住居跡や縄文時代晩期の屈葬人骨１体などのほか、縄文時代前期・晩期の遺物を中心に出土している。詳細は、『大付報文79』が刊行されている。

☆第３次調査

調査地点　宮古市大字崎鍬ヶ崎第14地割11番地２（第５図）

調査原因　個人住宅建築

調査期間　昭和60年（1985）

調査面積　150㎡

調査担当　武田将男

調査概要　縄文時代中期のフラスコピット

この調査は、今まで調査年次からはずれていたが、遺構などを検出しているので第３次調査として新らたに加える。

☆第４次調査

調査地点　宮古市大字崎鍬ヶ崎第14地割23番地（第５図）

調査原因　個人住宅建築

調査期間　昭和61年（1986）11月５日～11月22日

調査面積　500㎡

調査担当　高橋憲太郎

調査成果　縄文時代のピット群、遺物包含層（縄文時代前期）。『崎山遺跡群Ⅰ』に収録。地形的にみていくと明らかに大付遺跡の範囲内であり、これを大付遺跡第４次調査と訂正し加えるものとする。

☆第５次調査

調査地点　宮古市大字崎鍬ヶ崎第15地割

調査原因　倉庫建築（個人用）

調査期間　昭和63年（1988）５月20日～６月４日

調査面積　64㎡

調査担当　高橋憲太郎

調査成果　縄文時代晩期の土壙跡３基、小ピット８口。晩期前葉～中葉の遺物を中心に出土している。『崎山遺跡群Ⅲ』に収録。

従前は、大付遺跡第３次調査としていたが、新らたに加わったものや変更がありこれを大付第５次調査と変更する。

☆第６次調査

調査地点　宮古市大字崎鍬ヶ崎第15地割17番地３

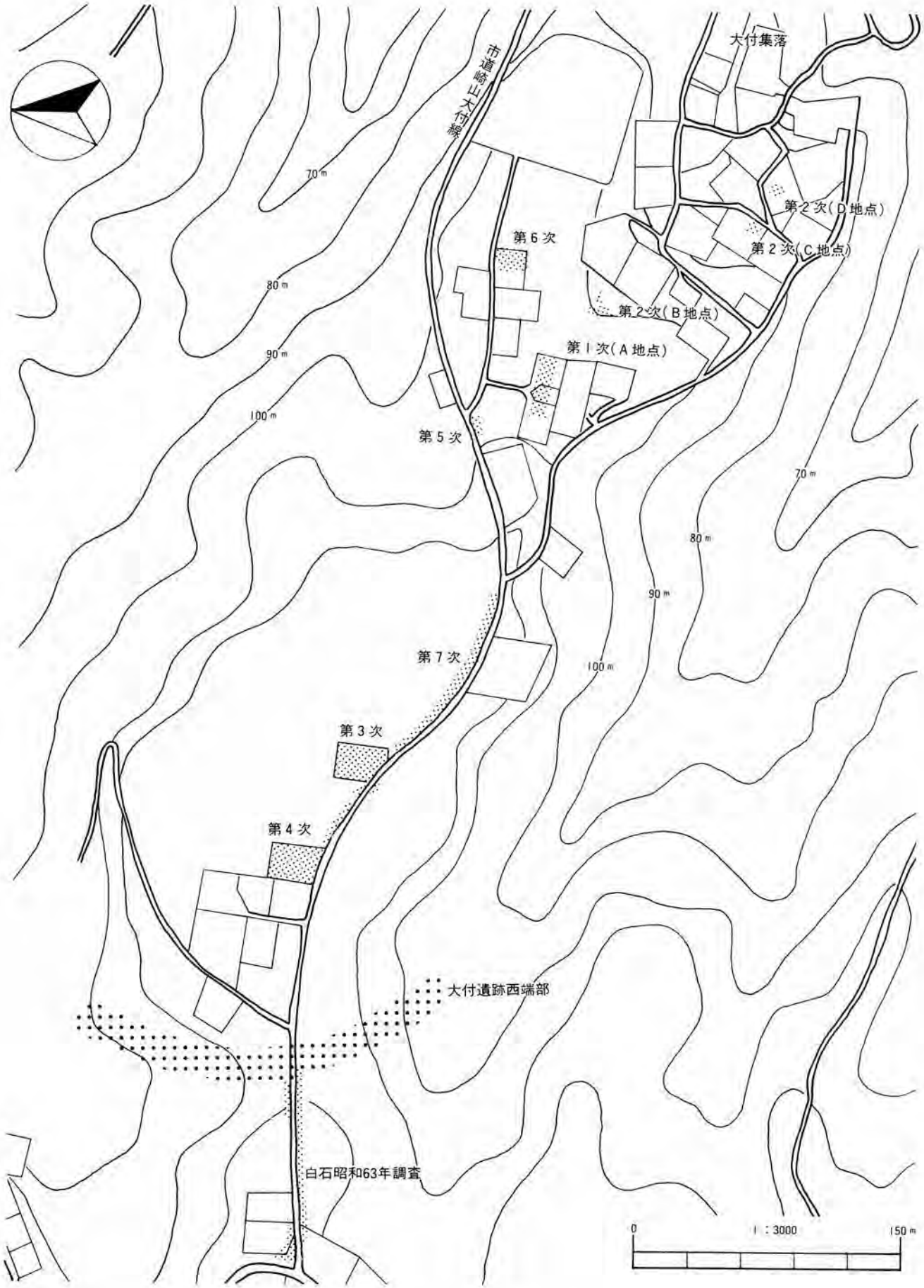
調査原因　個人住宅建築

調査期間　平成２年（1990）７月16日～８月１日

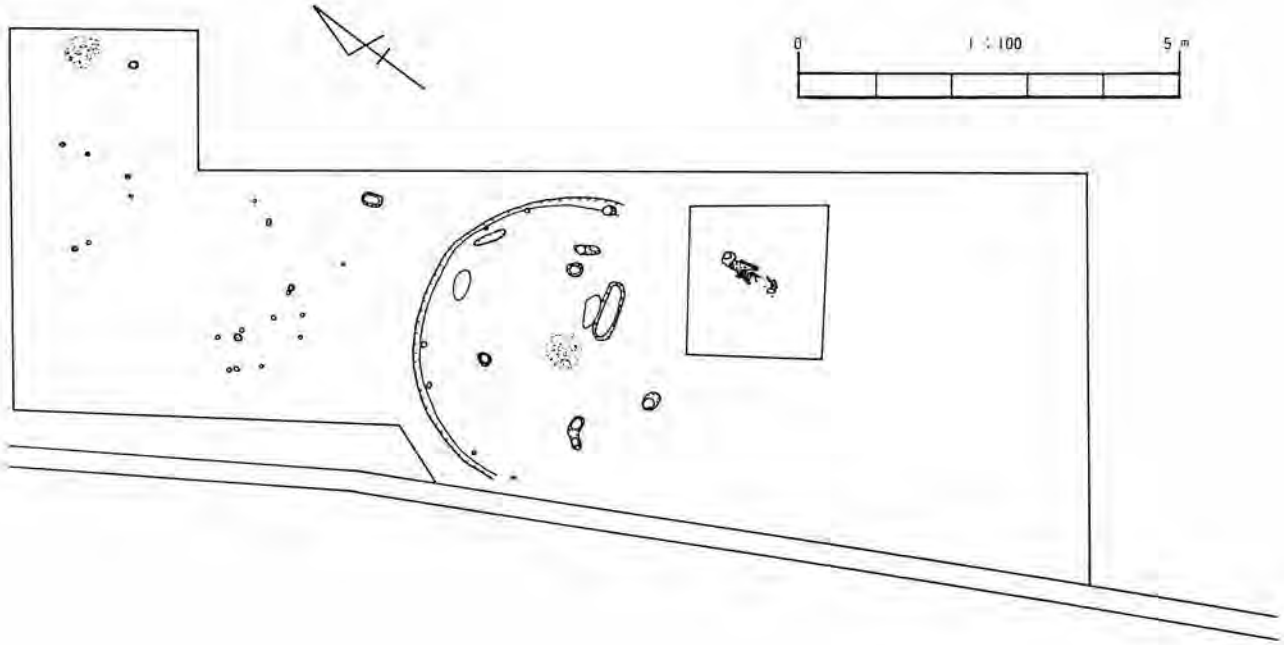
調査面積　155.5㎡

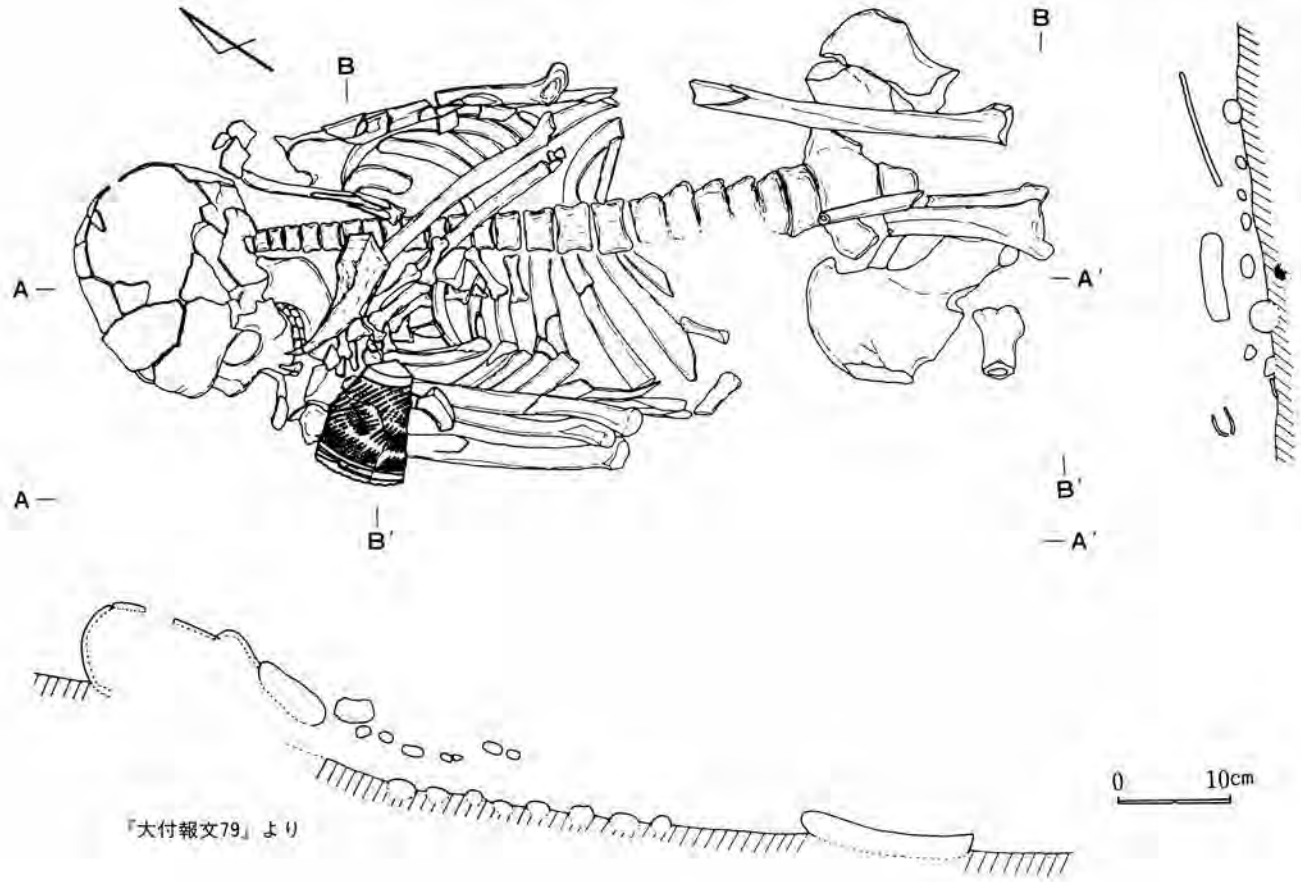
調査担当　鎌田祐二

調査成果　縄文時代後期末の墓壙跡１基、小ピット群。『金浜Ⅰ、大付90』に収録。



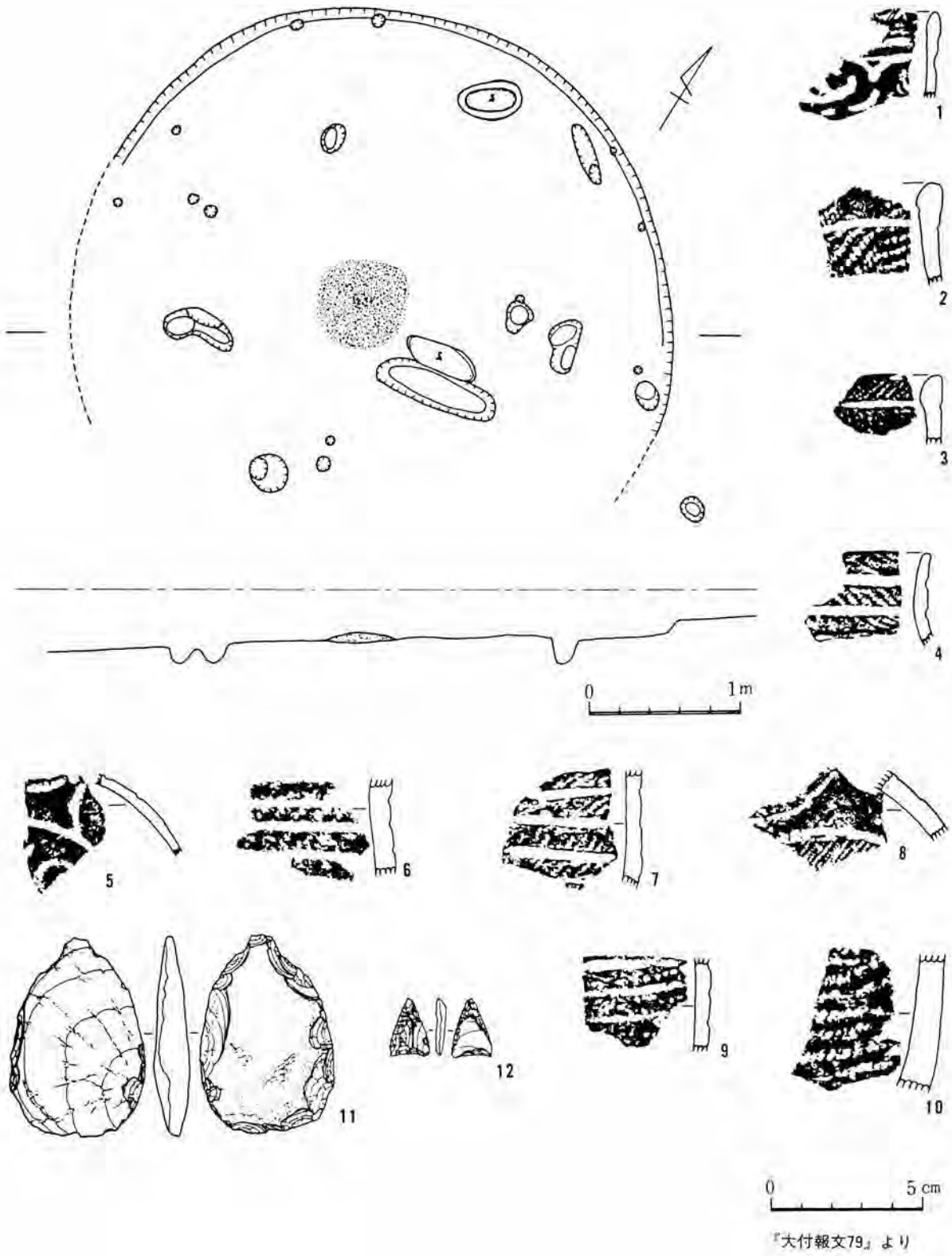
第5図　大付遺跡調査地点図





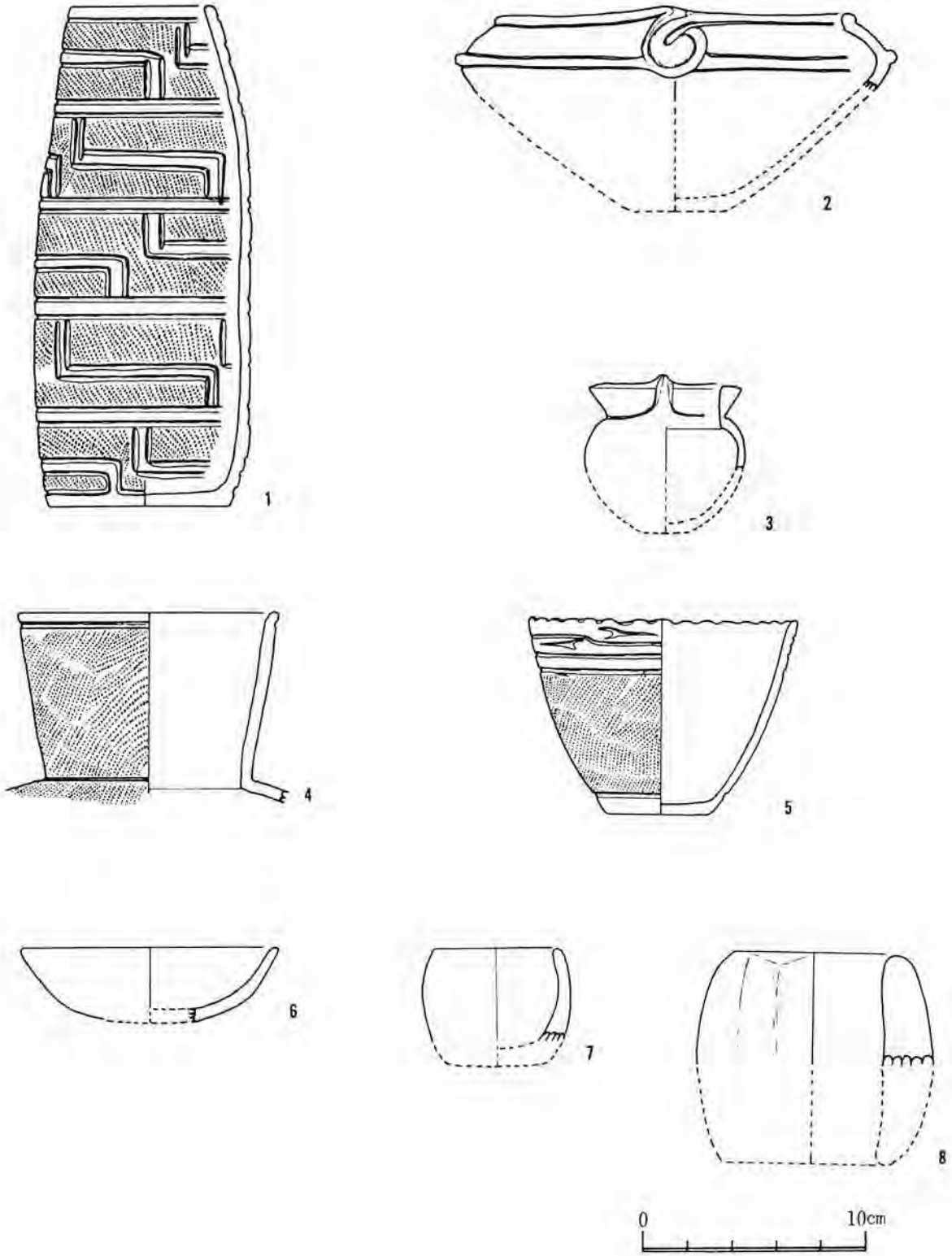
『大付報文79』より

第6図　第1次調査平面図と人骨出土状況図



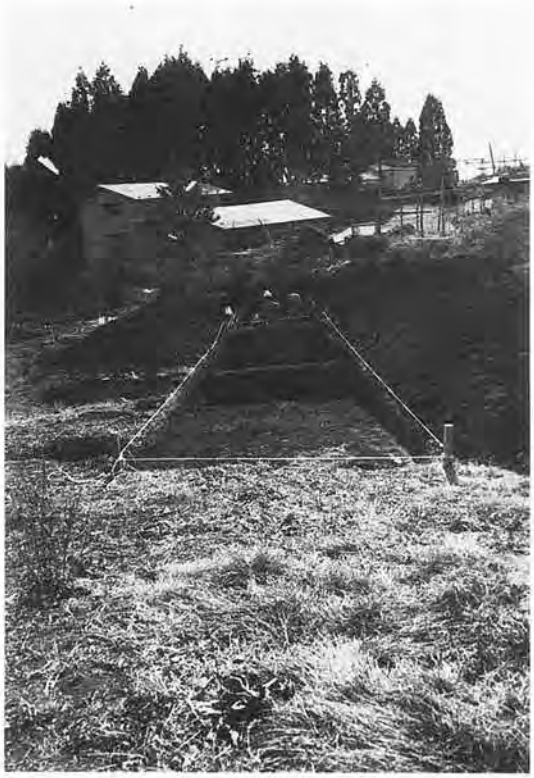
『大付報文79』より

第７図　第１次調査竪穴住居跡及び出土遺物図



第8図　第1次、第2次調査出土土器図

大付遺跡第１次、第２次調査（『大付報文79』より）



大付遺跡第１次、第２次調査（『大付報文79』より）

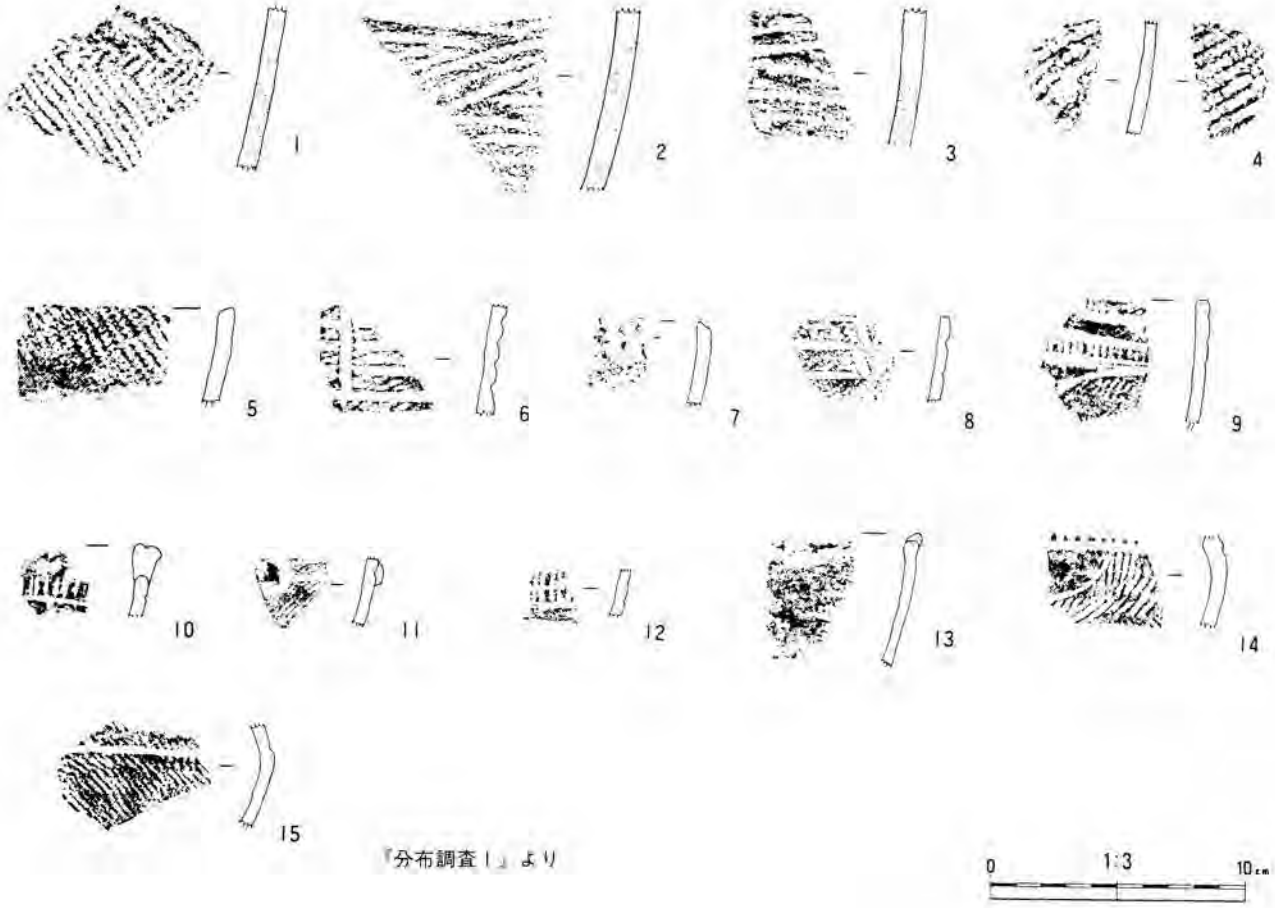
5　分布調査

宮古市教育委員会では、昭和57年度から60年度にかけて市内の遺跡詳細分布調査を実施しており、崎山地区では昭和57年度に分布調査を実施している。その成果は、『分布調査１』にまとめられている。大付遺跡第１次～第７次の発掘調査とは別の意味で多大な成果があげられており、以下、その概略を記す。

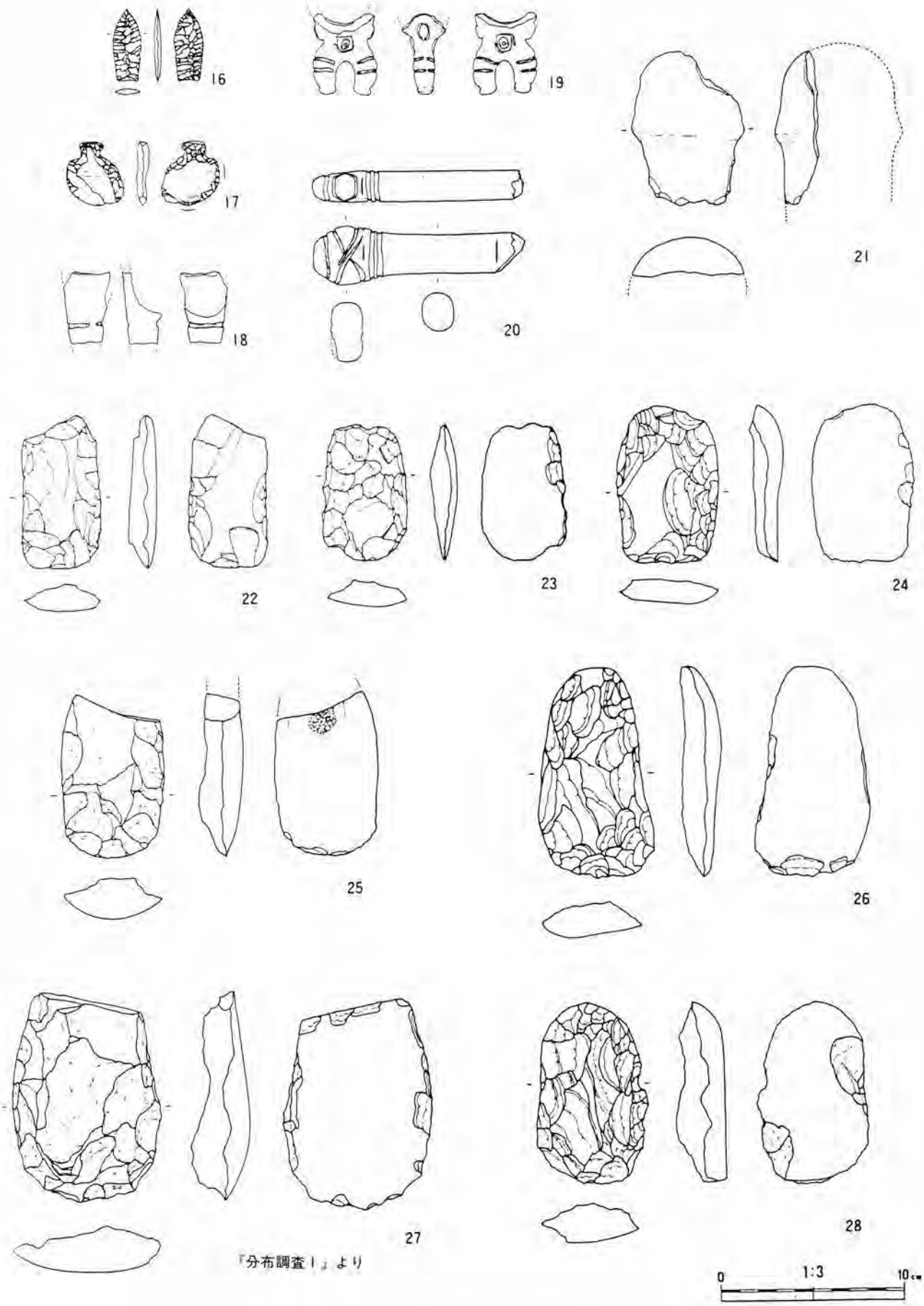
『分布調査１』

この分布調査は、遺跡の所在を確認することのみに留まらず、現地の状況（表面観察）を充分に行ない、これからなされるであろう発掘調査に対しその計画段階で学術的目的性を持つために欠くことのできない基礎データの収集・把握に努めたものである。従って、現地踏査においては、航空写真の作成・活用、水源、気象条件、周囲の環境なども含めた微地形の確認・推定を行ない、更には、個人蔵資料の調査、散逸資料の追求までもその意図に含めて実施している。しかも、それらを『分布調査１～４』として『分布図86』とともに統括的に報告されており、調査結果の活用にまで配慮がなされている。

さて、『分布調査１』では、大付遺跡からは縄文時代早期から前・中・後・晩期に亘る遺物が確認されており、また、中嶋吉兵衛収集の骨角器類なども掲載されている。この中には、蝉を模したと思われる骨角偶など珍しいものが含まれている。（第21頁写真図版）



第９図　大付遺跡出土遺物



第10図　大付遺跡出土遺物

大付遺跡出土骨角器ー中嶋コレクション（『分布調査１』より）

昭和56年（1981　宮古市教育委員会）に発行された『宮古市史　漁業・交易』には、「原始古代の漁労」ということで市内に分布する貝塚が紹介されている。それによれば、大付遺跡からは次の各種が出土している。

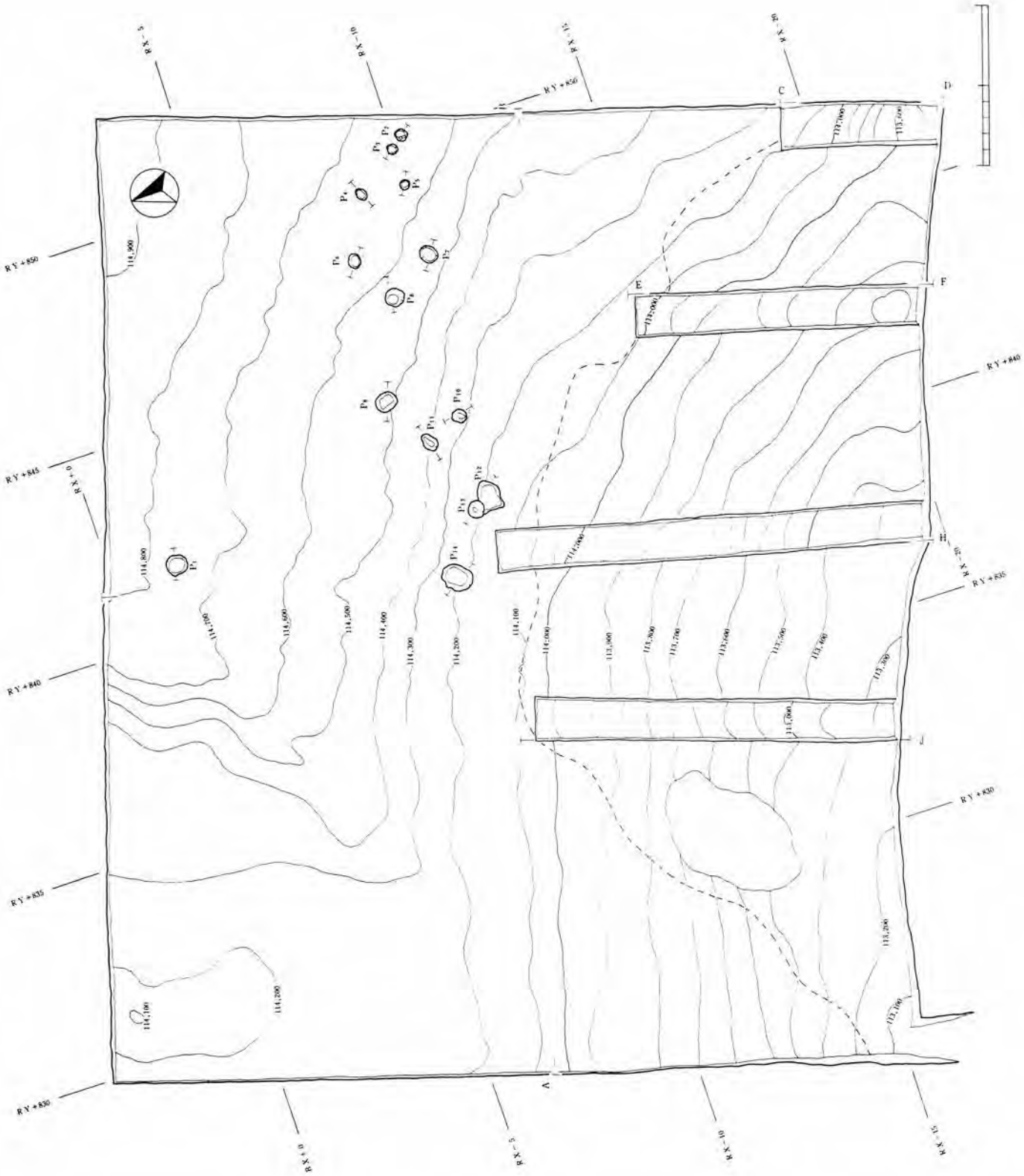
○二枚貝　アサリ、オニアサリ、ウチムラサキ、ウバガイ、ホタテガイ、アズマニシキ、マガキ、イガイ、アカガイ

○巻　貝　イソバショウ、ミガキボラ、ツメタガイ、アカニシ、レイシ、カサガイ、サルアワビ、クボガイ、チリメンボラ、アワビ

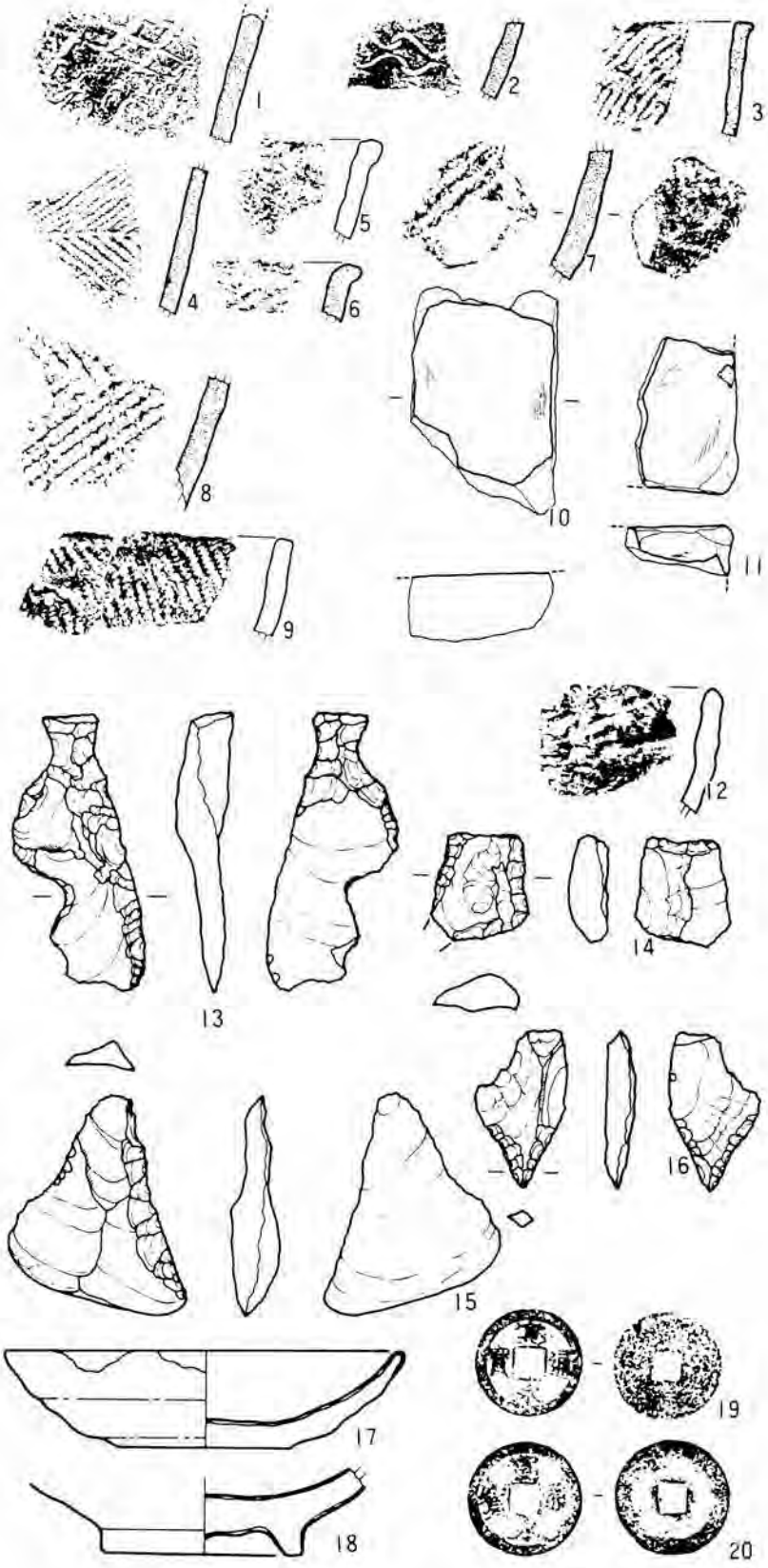
○魚類他　マグロ、ブリ、サバ、アヂ、タイ、クロダイ、サメ類、アカエイ、カサゴ類、カレイ類、ウニ類

貝類で19種、魚類で11種の出土が確認されているが、現在では、ほとんど表採はできないためこれ以降の追加資料はない。

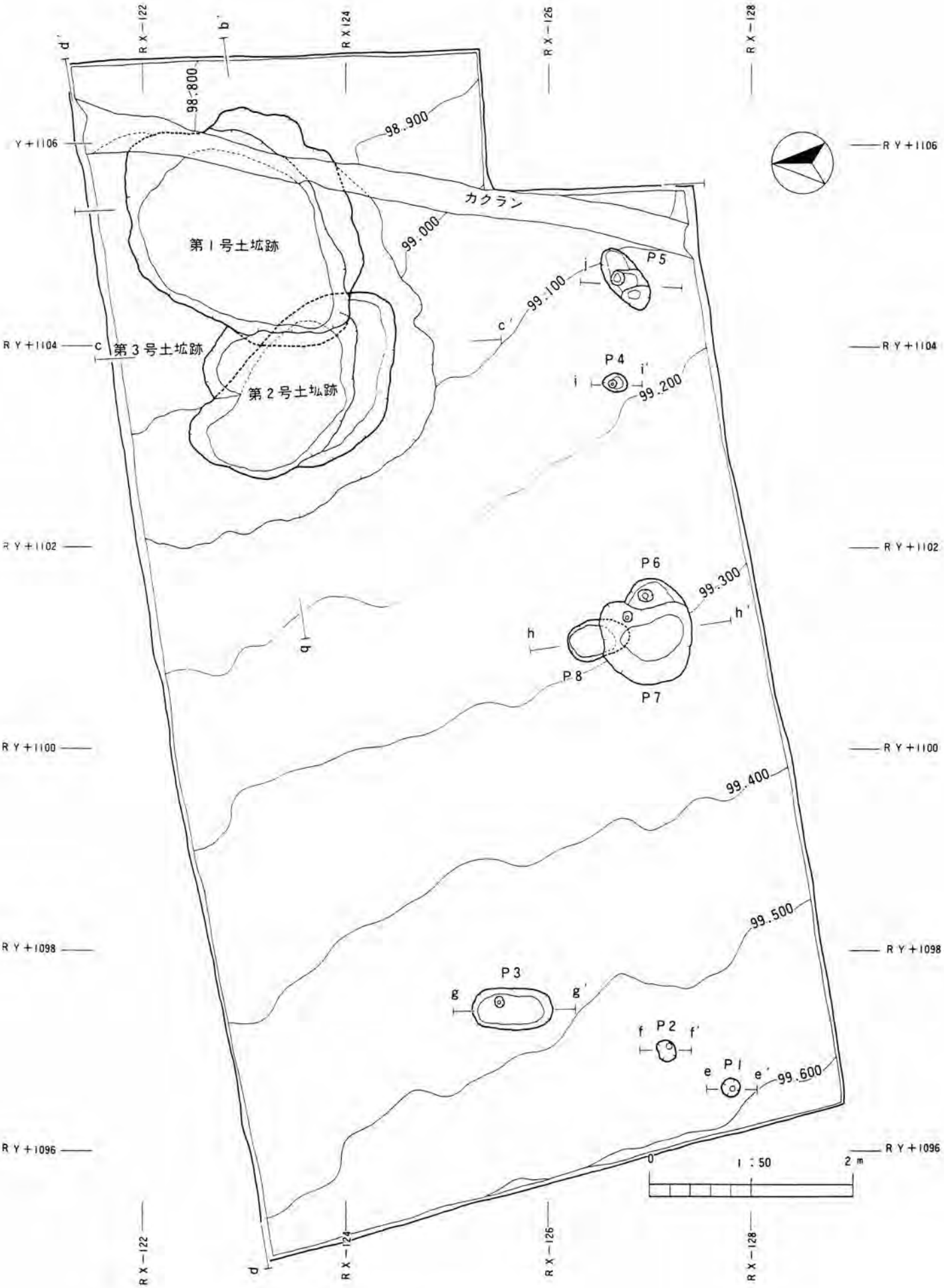
大付遺跡出土骨角器（『市史　漁業・交易』より）



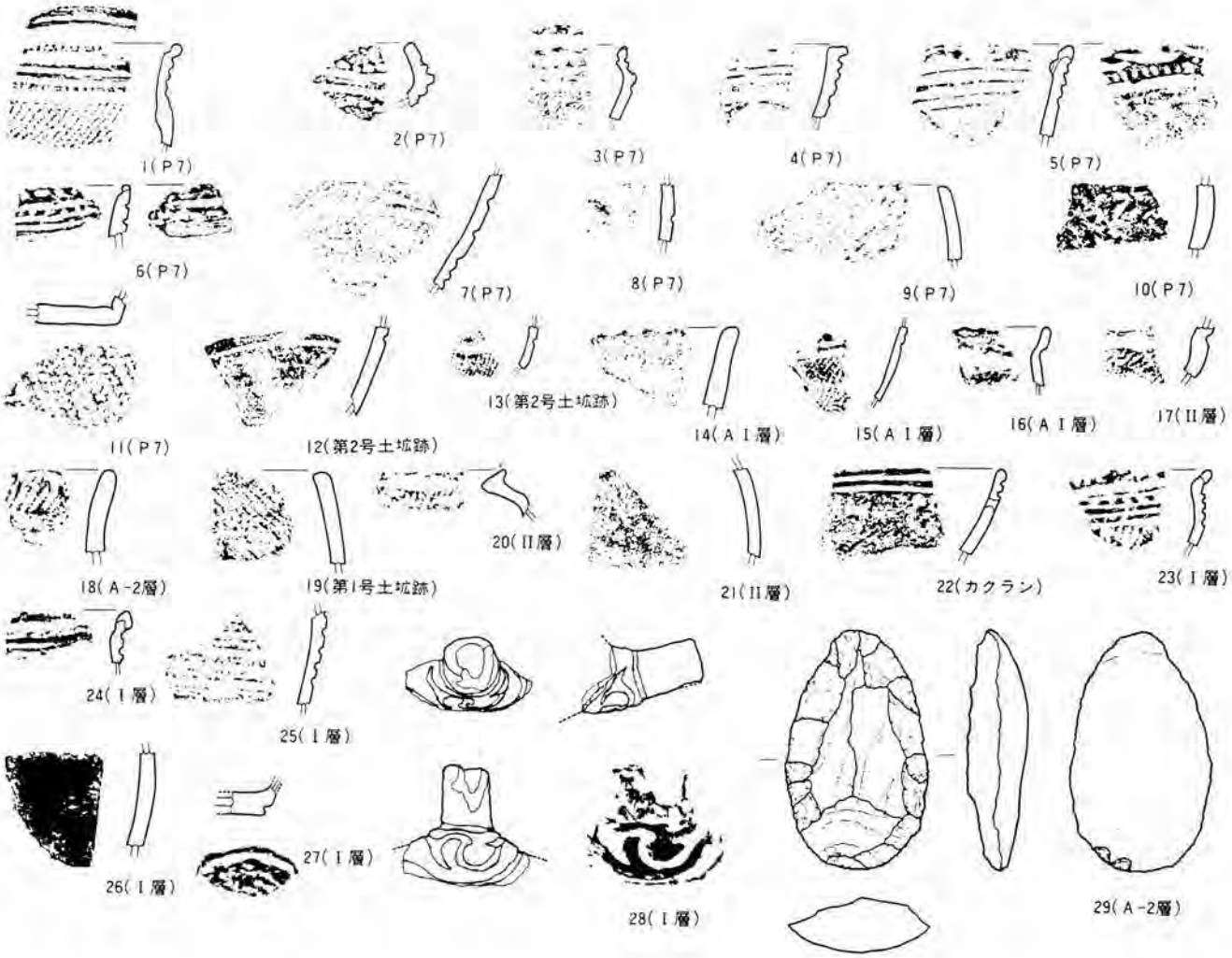
第11図　第４次調査全体図



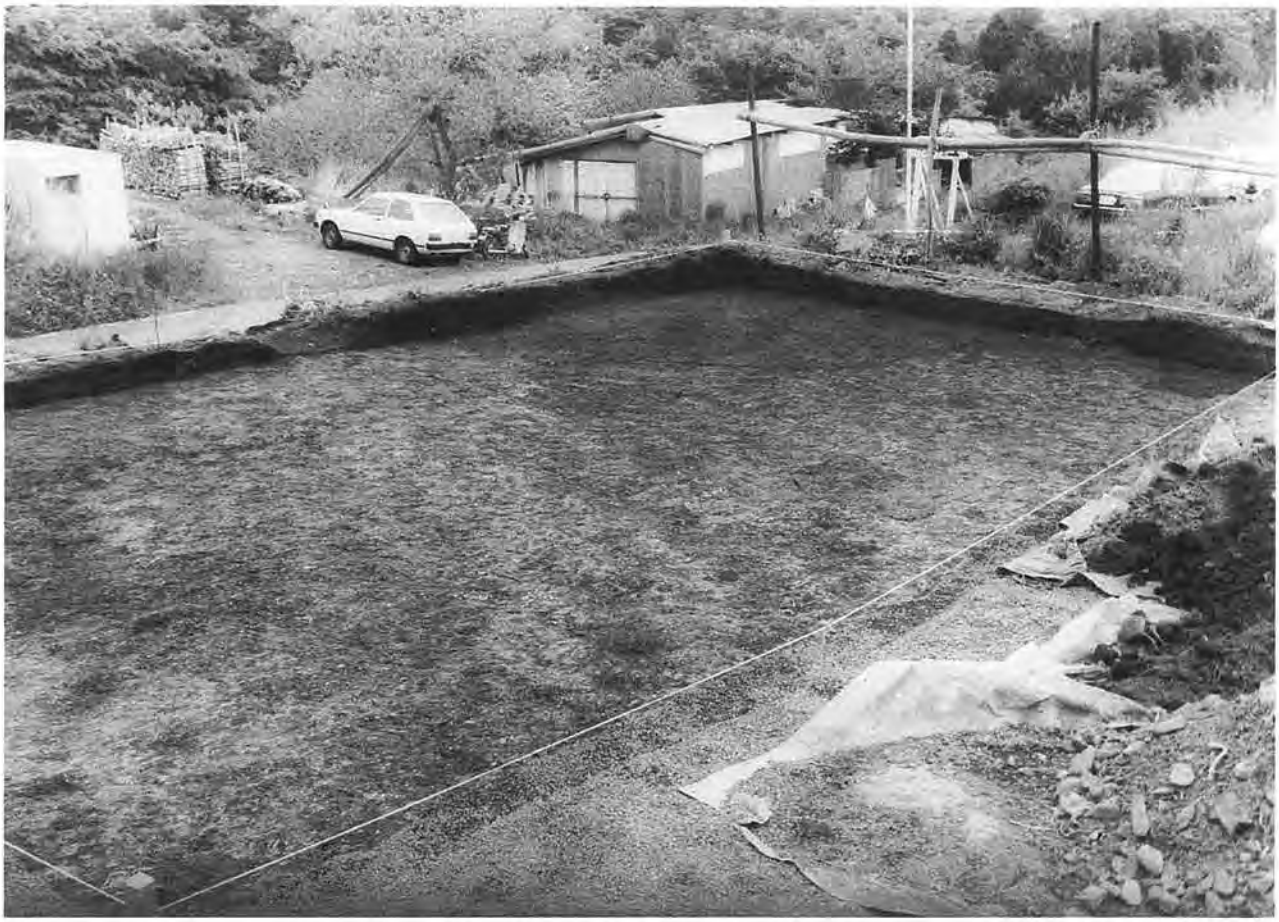
第12図　第４次調査出土遺物



第13図　第５次調査全体図



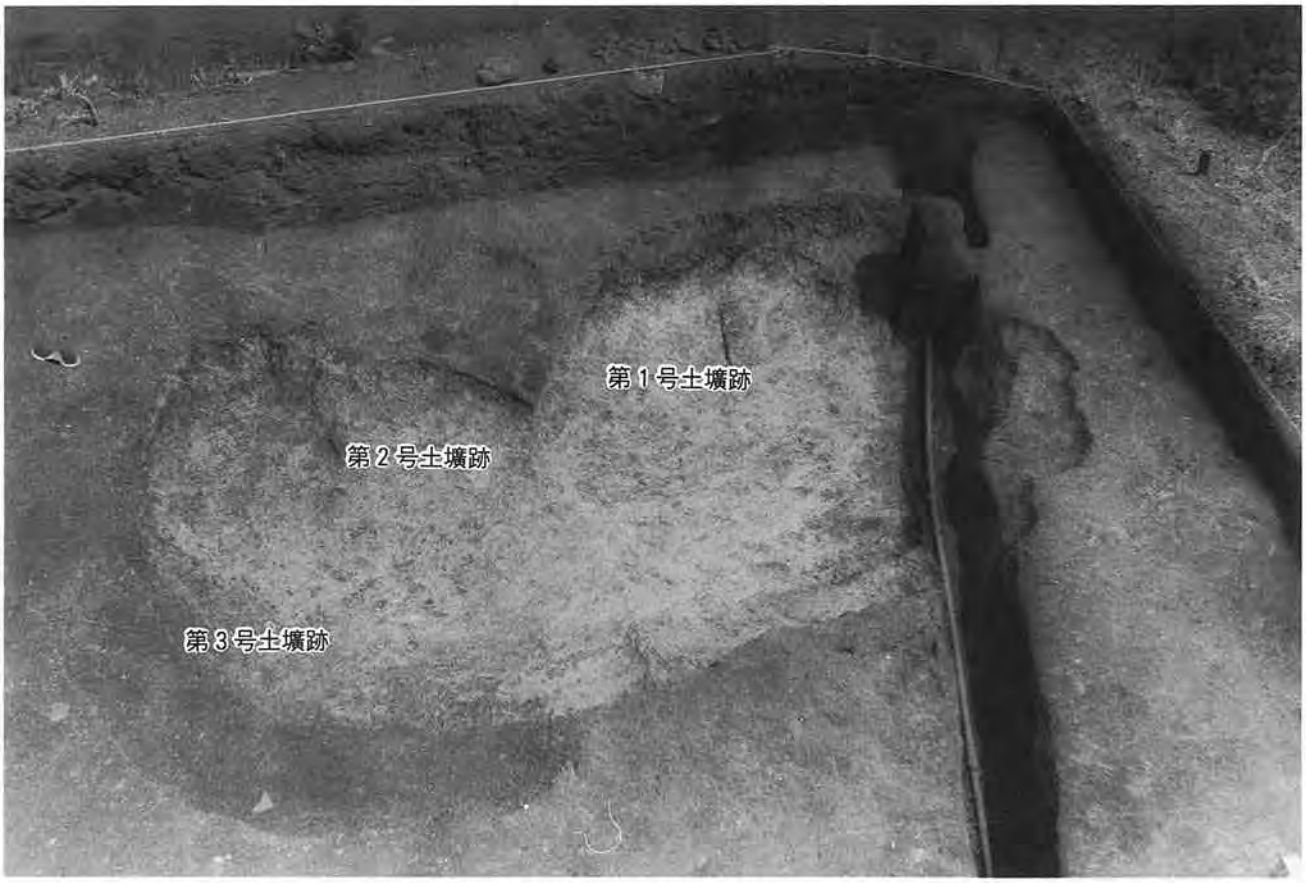
第14図　第５次調査出土遺物



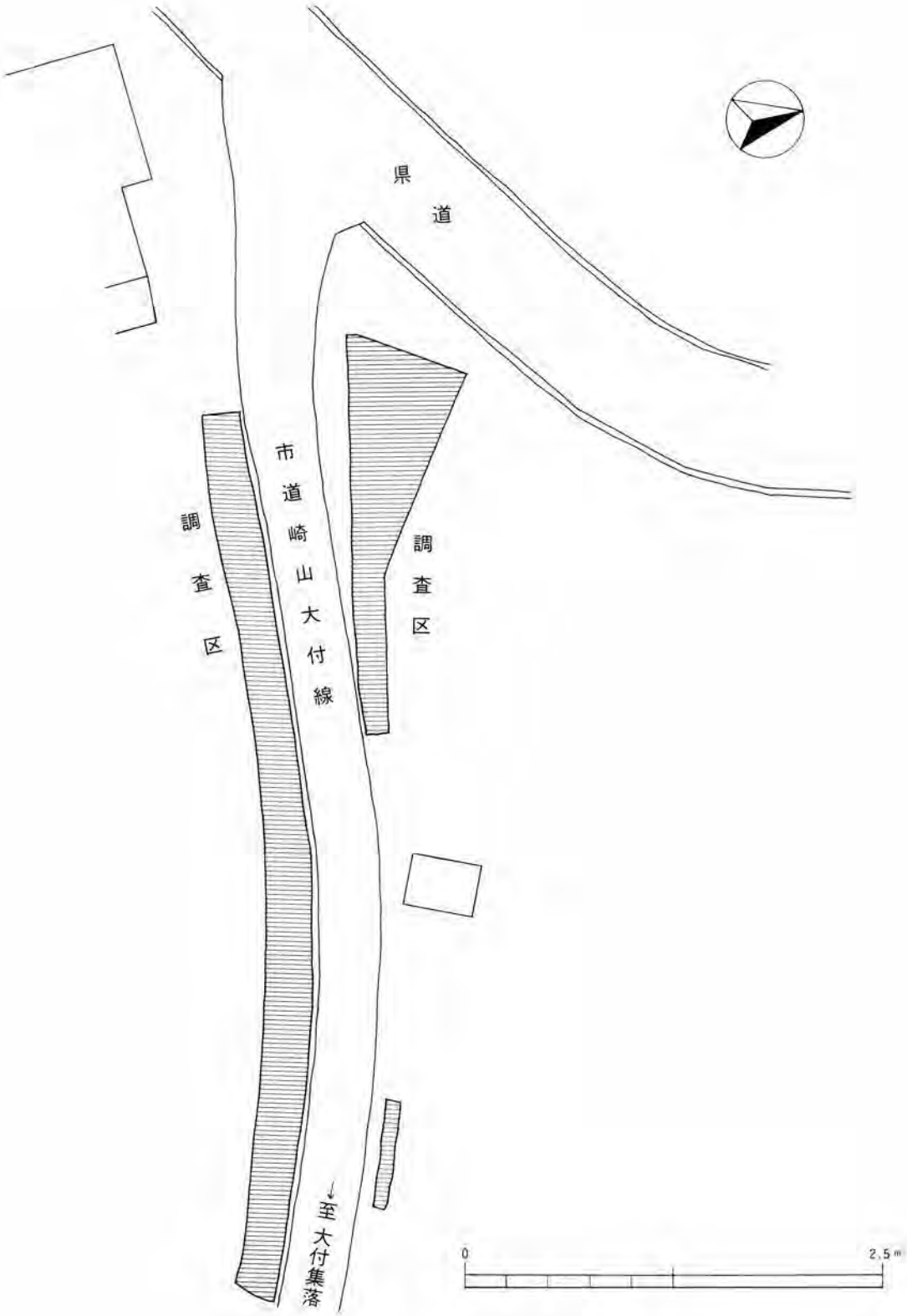
大付遺跡第５次調査区遺構検出状況（南西より）

大付遺跡第５次調査区遺構検出状況（南より）

第5次調査（第1号土壙跡、第2号土壙跡、第3号土壙跡）



第5次調査（第1号土壙跡、第2号土壙跡、第3号土壙跡）



第15図　白石遺跡昭和63年度調査区

☆白石遺跡昭和63年度調査

大付遺跡と白石遺跡の境付近の調査で、地形的には白石遺跡の北東端にあたる。検出遺構はなく遺物も極く少量であったため、今まで未報告のものであった。

調査地点　宮古市大字崎鍬ヶ崎字白石83番３、84番地外（第15図）

調査原因　市道崎山大付線改良拡幅工事（この延長が大付遺跡第７次調査にあたる）

調査期間　昭和63年（1988）10月24日～11月19日

調査面積　278.6㎡

調査担当　盛合義信

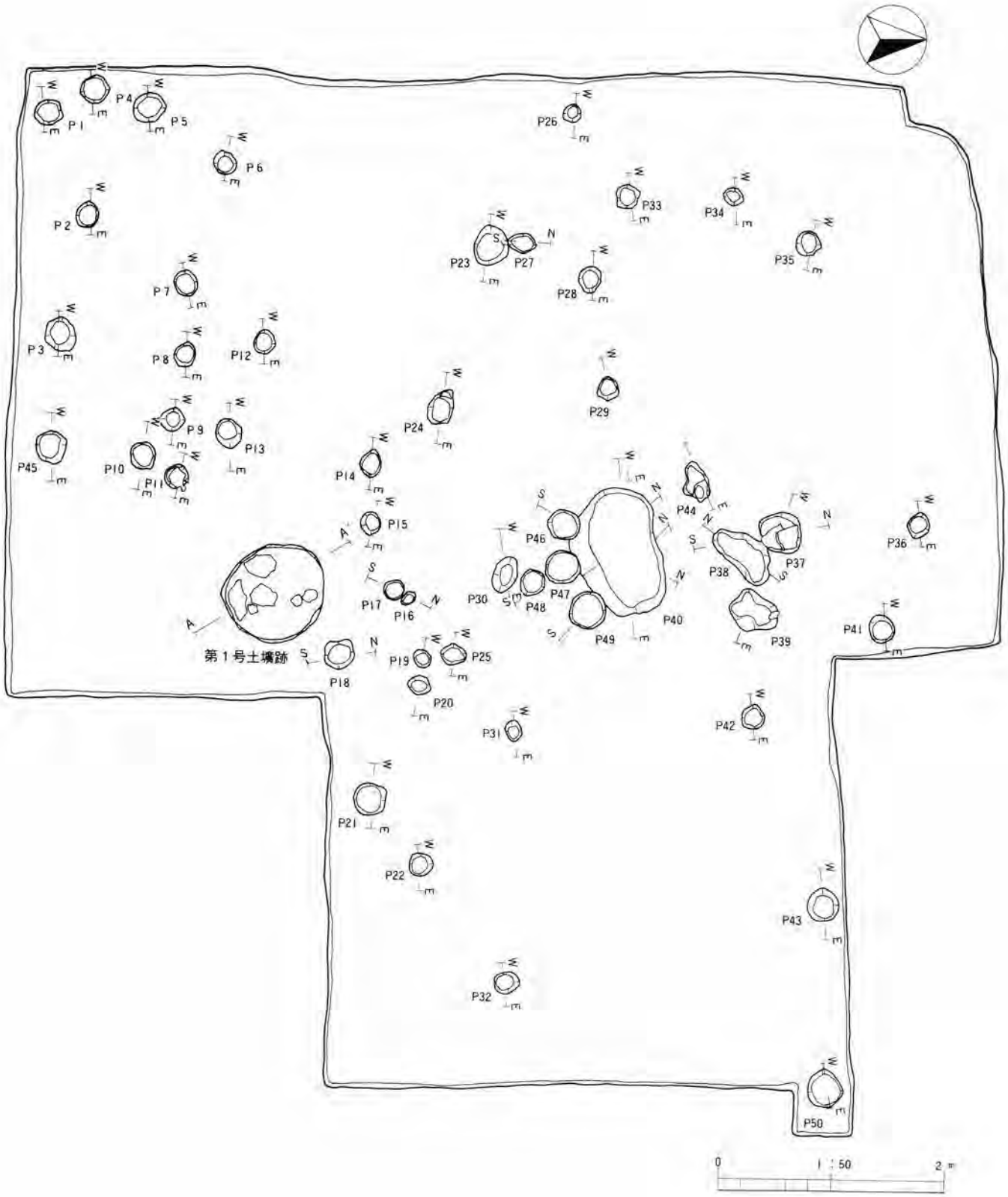
調査成果　検出遺構はなし。縄文時代中期に伴なうと思われる土器小片が若干量出土しているだけである。

白石遺跡　昭和63年調査区

白石遺跡　昭和63年調査区

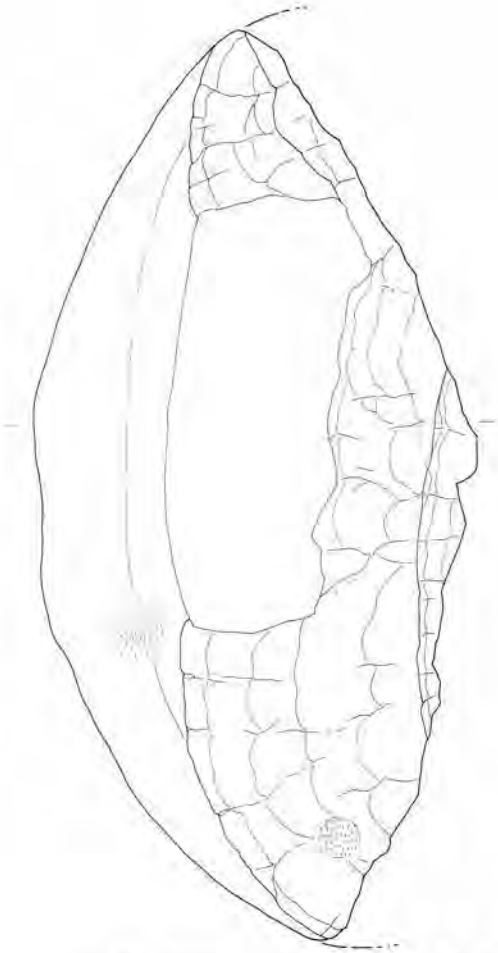
白石遺跡　昭和63年調査区

白石遺跡　昭和63年調査区

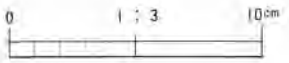

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P48
P49
P50
第１号土壙跡
0
1 : 50
2 m

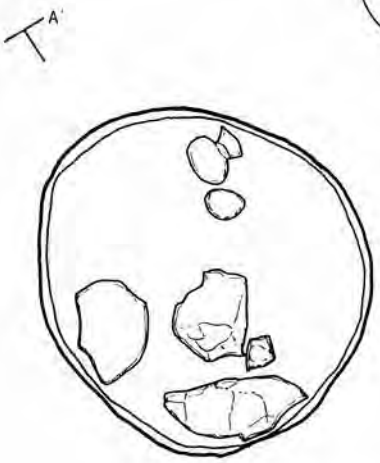
第16図　第６次全体図

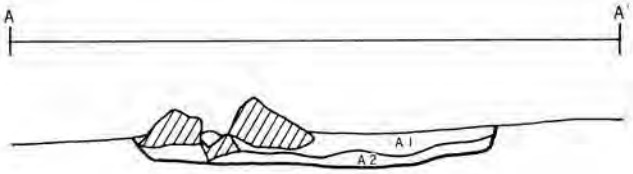
第１号土壙跡出土土器



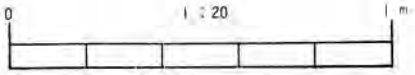
第１号土壙跡出土石器







第１号土壙跡

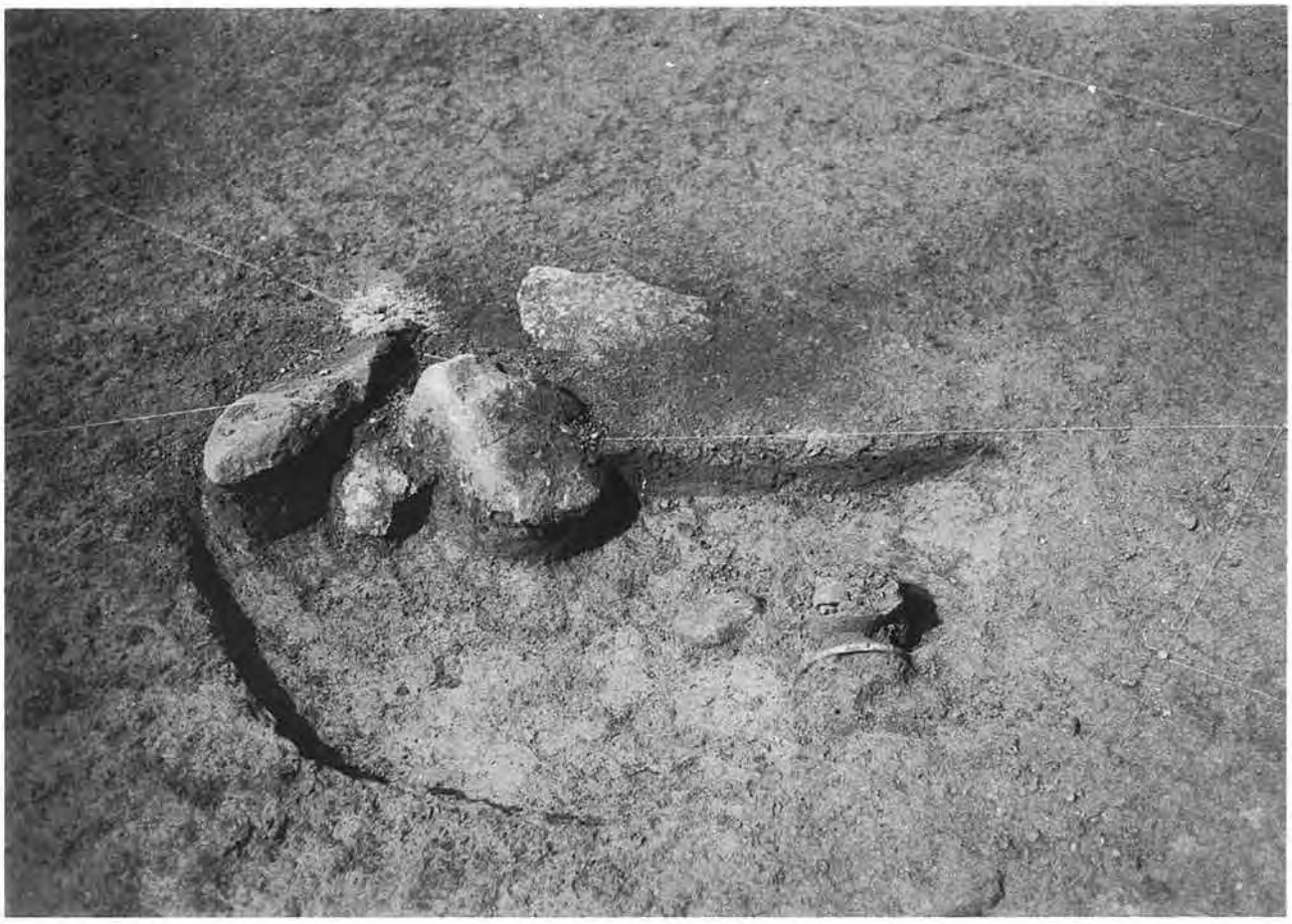


第17図　第６次調査土壙跡と出土遺物

第 6 次調査区　景観

第 6 次調査区　遺構検出状況

第 6 次調査区　遺構検出状況



第 6 次調査区　第 1 号土壙跡

Ⅲ　調査内容

1　調査状況

本書の調査経過でも記した通り今回の調査は、市道拡幅に伴うものであったため、調査区がせいぜい２～３ｍ幅と狭く、総延長は約150ｍであった。従って、東西に長いトレンチとなったが、所々、住宅入口や畑地への取付け道などで途切れており調査区トレンチを西から東へ向かってＡトレンチ、Ｂトレンチ……Ｇトレンチとトレンチ名を付した。

調査は、Ａトレンチより実施して来た。基本層序は、第20図にＤトレンチの断面図だけを掲載しているが、Ａ～Ｃ、Ｅ～Ｇトレンチでは表土（Ⅰ層）下が、すぐ地山面（Ⅳ層）のみであるため割愛した。以下、Ｄトレンチ断面に基づく基本層序を記す。

基本層序

Ⅰ層　表土層（現耕作土）。非常にやわらかくしまりのない暗褐色土層。

Ⅱ層　盛土層。現市道を建設する際に整地した上に盛土したもの。赤褐色～黄褐色で固くしまっている。礫などを混在する。

Ⅲ層　旧耕作土層。市道建設時の削平をまぬがれたわずかな部分。やや固くしまった黒褐色土層を主体とするもので、炭化物粒や土器の小片などが含まれる。

Ⅳ層　地山、もしくは漸位層。黄褐色～褐色の粘質土（原地山層）。

遺構は、いずれもⅣ層の地山面上で確認される。Ｅ～Ｇトレンチ内では、ほとんど遺物も確認できず遺構も検出しなかった。以下、Ａ～Ｄトレンチの遺構について記す。

2　検出した遺構・遺物

Ａトレンチ　竪穴住居跡１棟、竪穴跡１基、土壙跡数基、小ピット群を検出したが、小ピット群については、一覧表を付したので詳述しない（以下、同様）。

第１号竪穴住居跡（第21図　写真図版）

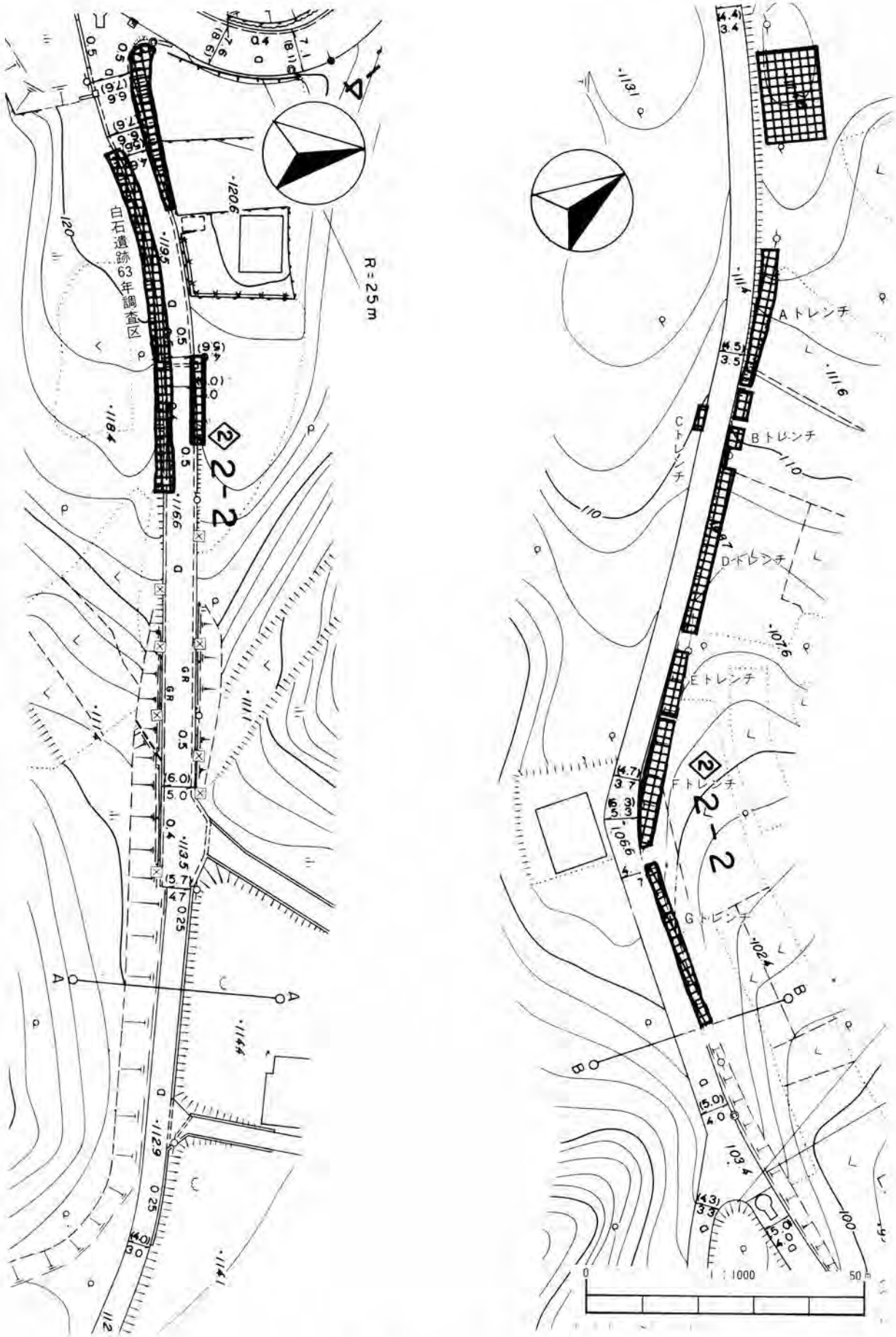
Ａトレンチ内のほぼ中央部道路側に検出した。南側半分は、道路建設時に破壊されている。規模は、東西3.45ｍ、南北 2.3ｍ以上をはかる円形状のプランを呈するものと思われる。壁は、ほぼ直に立ち上がり壁高は北壁側で 0.1ｍをはかる。埋土は、Ａ層から成りA1、A2層に細分できる。A1層は、やや暗い褐色土を基本とし固さ、しまりともに中程度てある。焼土粒や炭化物粒が含まれている。A2層は、褐色土を基本とし固くしまっている。床面は、ほぼ平坦面で地山面をそのまま利用している。床面東壁寄り部分に焼土の広がりを確認したが、炉石及び炉石の抜き取り痕は確認できなかったが、地床炉に相当するものか。焼土の堆積は薄く、あまり焼けてはいない。柱穴などのピットは、床面上では確認できなかった。北西壁側に第　号土壙跡を検出したが、新旧関係を把握せず掘り下げてしまったため、当住居跡に伴なうものかは不明である。遺物はほとんど出土しておらず、第27図１と２が当住居跡埋土より出土したものであるが、どちらも縄文主体の口縁部の破片である。第28図４は扁平な楕円形礫を使用した敲打磨石で埋土中より出土しているものである。

規　模

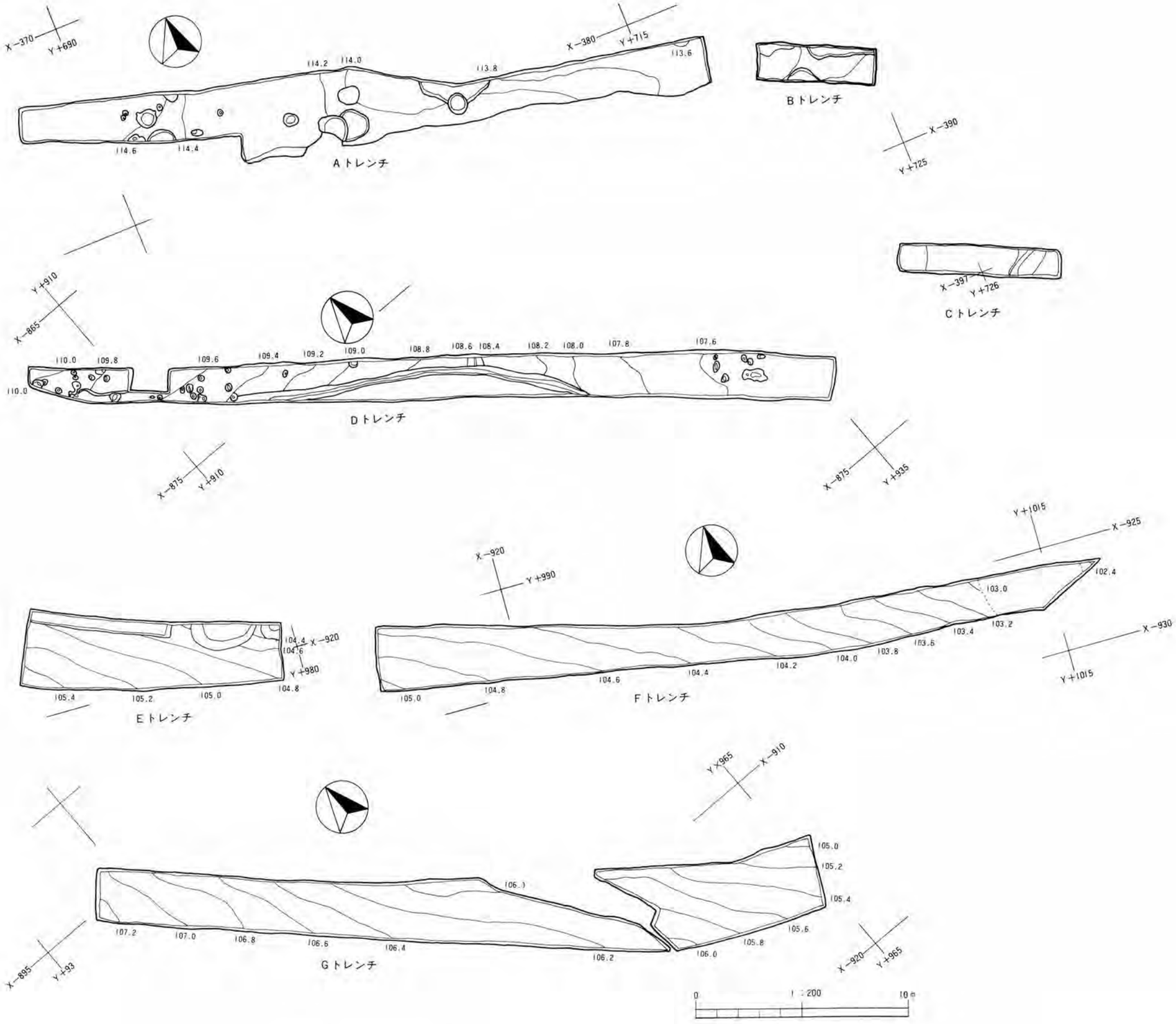
埋　土

地床炉

遺　物


白石遺跡
63年調査区
R=25m
2-2
Aトレンチ
Bトレンチ
Cトレンチ
Dトレンチ
Eトレンチ
Fトレンチ
Gトレンチ
1:1000
50m

第18図　調査区配置図


X−370
Y+690
114.2
114.0
113.8
X−380
Y+715
113.6
114.6
114.4
Aトレンチ
Bトレンチ
X−390
Y+725
Y+910
X−865
Cトレンチ
X−397
Y+726
110.0
109.8
109.6
109.4
109.2
109.0
108.8
108.6
108.4
108.2
108.0
107.8
107.6
110.0
Dトレンチ
X−875
Y+910
X−875
Y+935
Y+1015
X−925
X−920
Y+990
102.4
103.0
103.2
103.4
103.6
103.8
104.0
104.2
104.4
104.6
104.8
105.0
X−930
Y+1015
104.4
104.6
X−920
Y+980
105.4
105.2
105.0
104.8
Eトレンチ
Fトレンチ
Y+965
X−910
105.0
105.2
105.4
105.6
105.8
106.0
106.2
106.4
106.6
106.8
107.0
107.2
Gトレンチ
X−885
Y+93
X−920
Y+965
0
1 : 200
10 m

第19図　調査区全体図

第１号土壙跡（第21図）

第１号竪穴住居跡と重複するが、これよりも新しい時期のものである。

長軸で1.7m、短軸で1.3mをはかる楕円形プランを呈するもので、検出面からの深さは、0.3mをはかる。また、底面中央部やや東寄りに径0.3mの円形プランを呈する小穴を有する。この小穴は、土壙跡底面より深さ0.15mをはかる。

埋土は、A層、B層に大別される。A層はA_1、A_2層に細分される。A1層は、暗褐色～褐色に近かい土を基本とするもので、固さ・しまりともに中程度である。炭化物粒子の混入が認められる。A2層は、褐色土を基本とするもので黄褐色土が塊粒状に混入する。固さ・しまりはともに中程度である。B層は、底面にある小穴に堆積するもので、やや暗い褐色土を基本とする。固さ、しまりを欠く。

埋土中からの出土遺物はない。

第２号土壙跡（第21図）

第１号竪穴住居跡床面上に検出したものであるが、新旧関係については不明である。

径0.6mをはかる円形プランを呈するもので、第１号竪穴住居跡の床面からの深さ0.25mをはかる。

埋土はA層から成る。暗褐色土を基本とし褐色土を小塊～粒状に混入する。固さ・しまりともに中程度で若干量ではあるが、炭化物粒が認められる。

埋土中からの出土遺物はない。

第３号土壙跡（第21図）

第１号竪穴住居跡東壁側と重複するが、これに切られる古い時期のものである。

規模は、長軸で1.1m以上、短軸で1.45mをはかる楕円形プランを呈するものである。深さ0.05mと浅い。

埋土は、暗褐色土を基本とするC層から成る。固さ・しまりともに欠く。

出土遺物はない。

第１号竪穴跡（第22図）

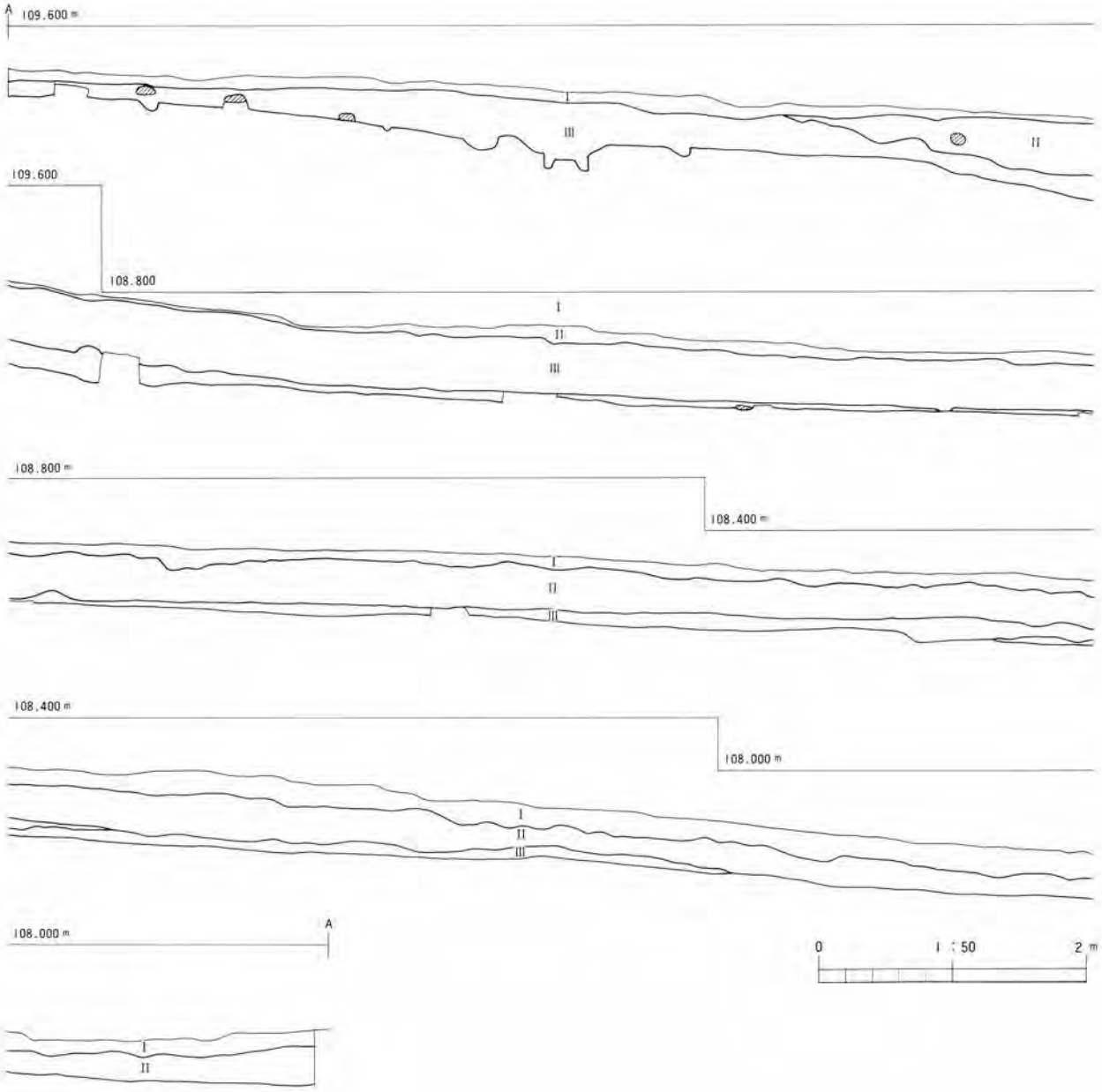
Aトレンチ第１号竪穴住居跡の東側に位置する。第４号土壙跡と重複するが、これを切り新しい時期のものである。北側の大部分は調査区外のため未調査で、全容が解明されれば住居跡となる可能性が大きい。

規模は、東西3.3m、南北0.9m以上となる。全体の形状は円形ないし楕円形状になるものと推測される。壁は、ほぼ直に立ち上がり南壁側で0.25mを残す。

埋土は、褐色土を主体とするA層から成り、A_1、A_2層に細分される。A_1、A_2層とも固さ・しまりは中程度だが、A_1層には暗褐色土が塊粒状に混入し炭化物粒が認められる。

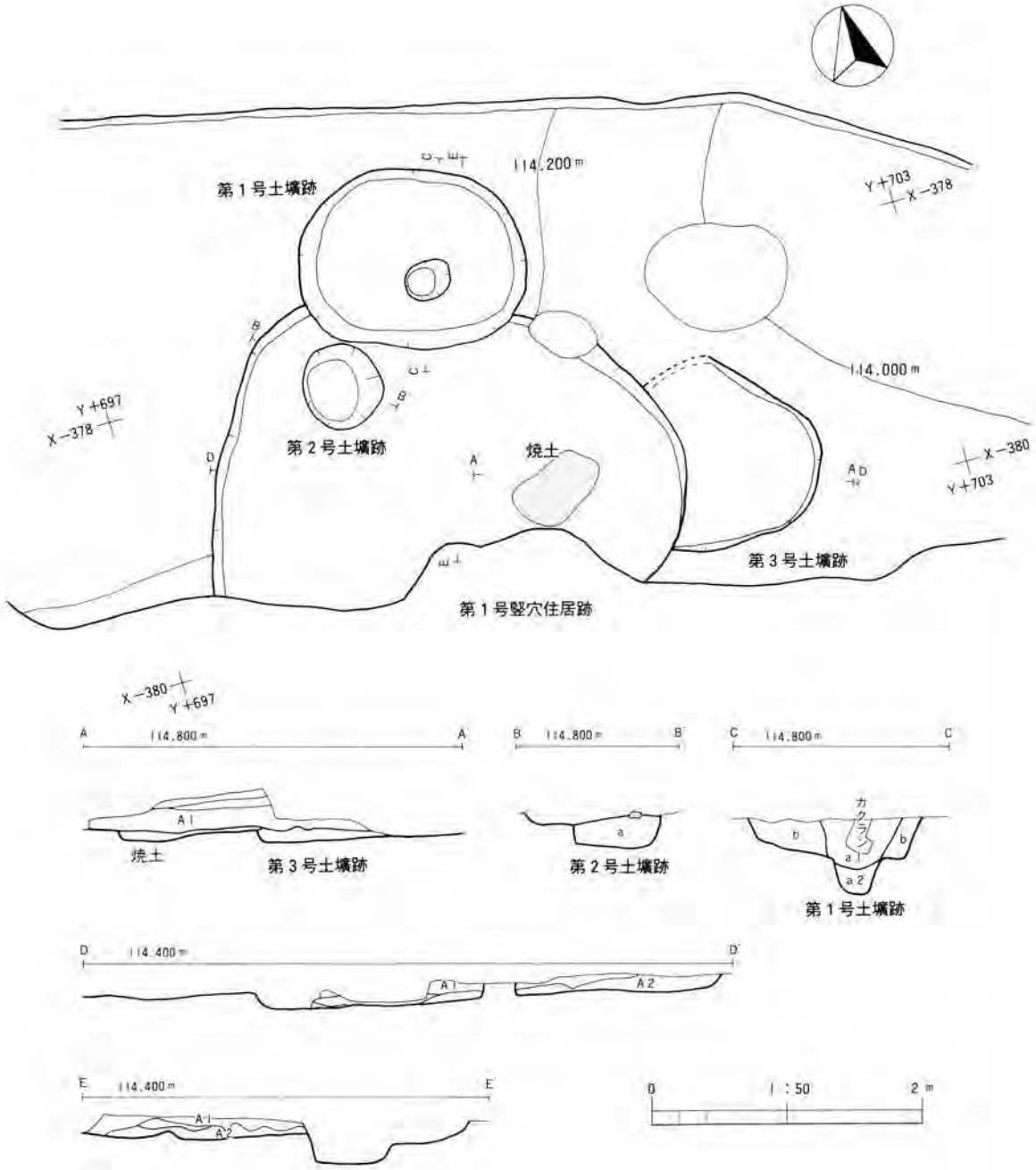
床面は、地山面をそのまま利用した平坦面で調査区内の床面上には、柱穴、炉跡などの施設は確認できなかった。

遺物は、A_2層下部より出土している。第27図３～11が当竪穴より出土したものである。３



第20図　Dトレンチ土層断面

～５は同一個体片である。３は口縁部の破片で複合口縁となり、格子目状の細沈線文が施文される。４、５は胴部の破片で沈線というよりは引っかき傷程度となる。３の口縁上端外面にはタール状の炭化物が付着している。６は粘土紐隆帯を貼り付け施文するもの。７～10は、いずれも胎土中に粗い砂粒～小石状のものを多量に含み、焼成状態も不良で似かよっており同一個体片と思われる。７、９、10は縄文以外の施文は認められないが、８は、平行沈線間に刺突列を施すものである。11は、隆帯により文様を施文するものである。



第21図　第１号竪穴住居跡、第１～３号土壙跡

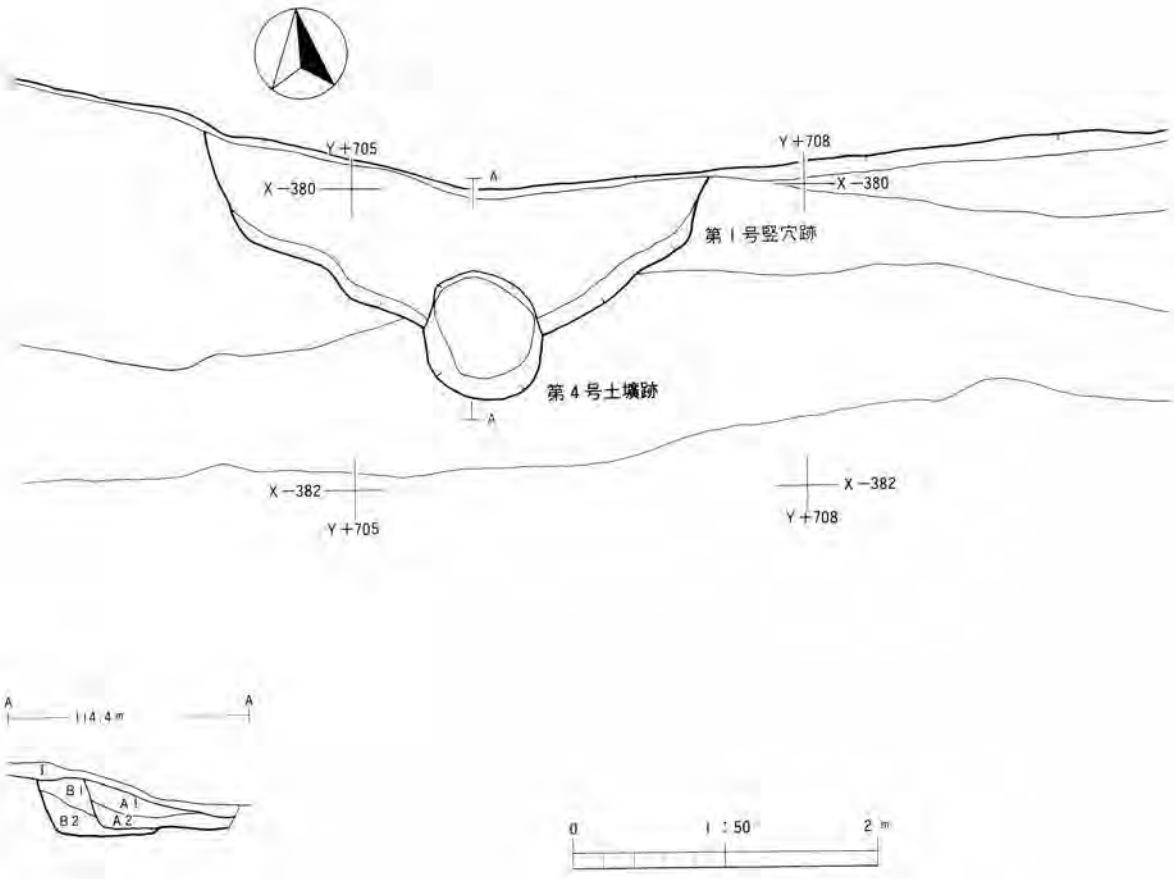
第４号土壙跡（第22図）

第１号竪穴跡と重複するが、これに切られる古い時期のものである。

0.85×0.75m規模をはかる、ほぼ円形状のプランを呈する。検出面からの深さは、0.35mをはかる。

埋土は、B層から成りB_1、B_2層に細分される。B_1層は、暗褐色～褐色に近かい土を基本とするもので固さ、しまりも欠き、褐色土塊が混入する。B_2層は、暗褐色土を主体とするもので固さ、しまりを欠く。

埋土中よりの出土遺物はない。



第22図　第１号竪穴跡、第４号土壙跡

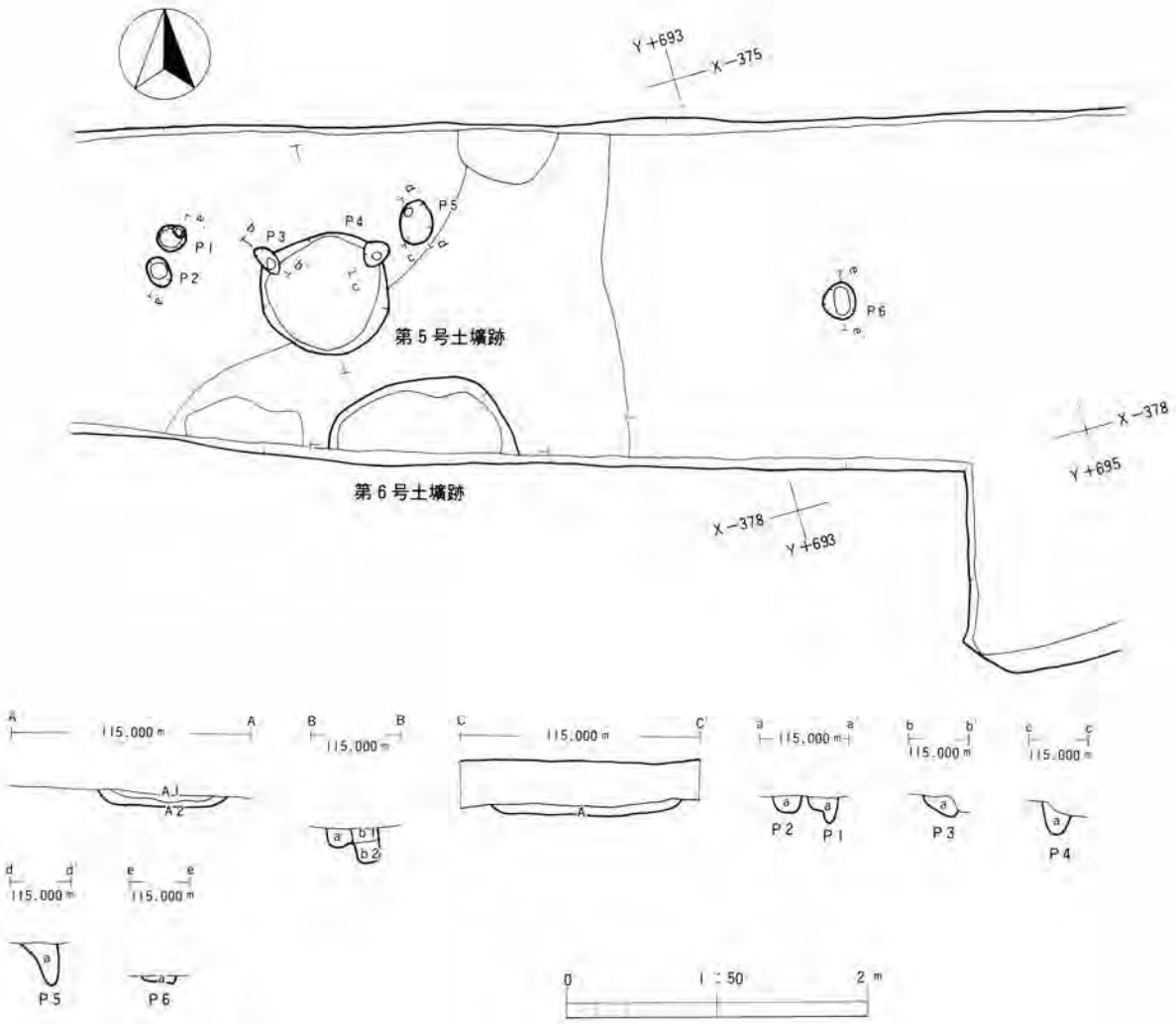
第５号土壙跡（第23図）

Ａトレンチの西端側に位置する。小ピット群のＰ$_3$、Ｐ$_1$と重複しているが、これらに切られるものである。

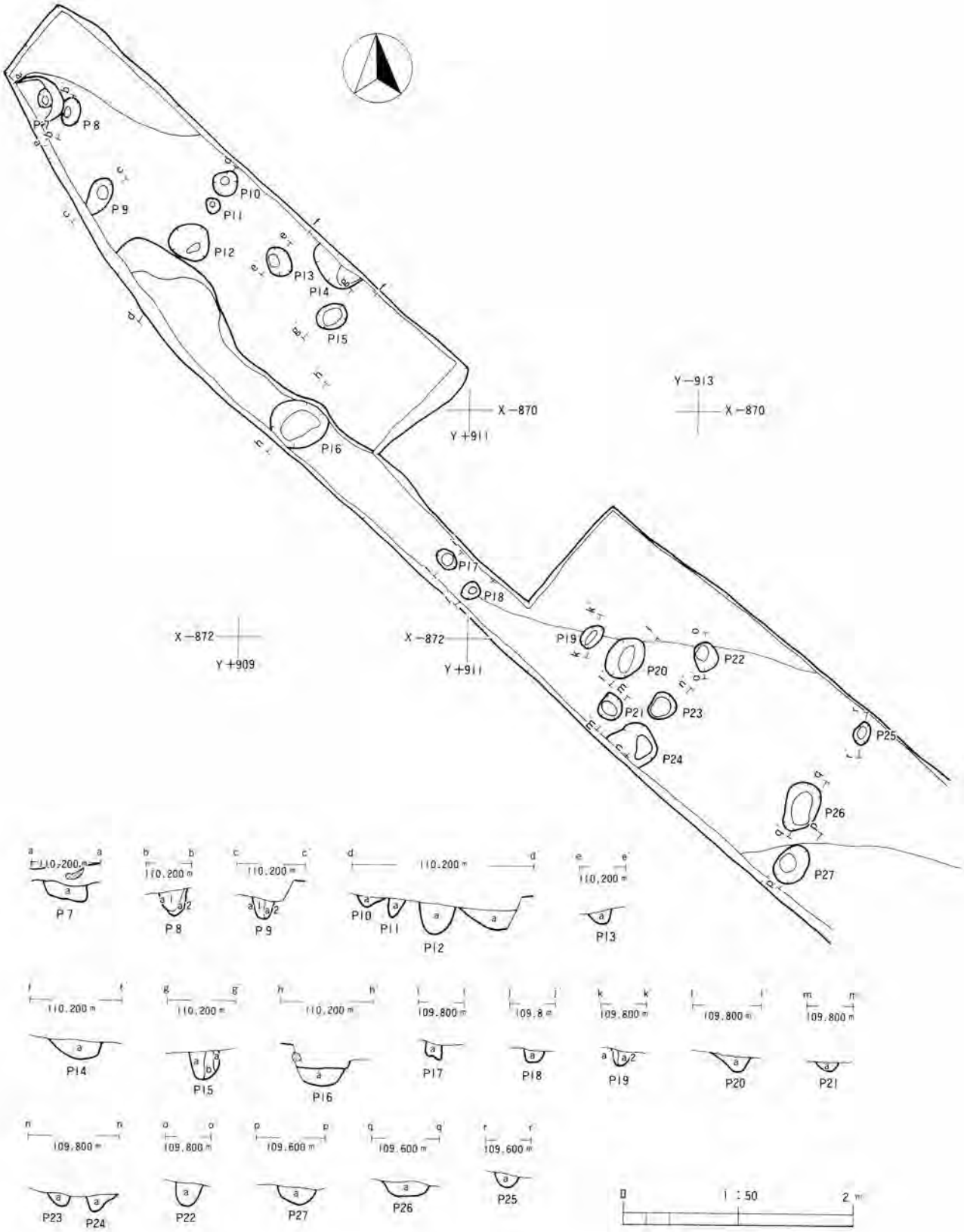
径0.8mをはかる円形プランを呈するものである。検出面からの深さは、0.08ｍと浅い皿状の土壙跡である。底面は、ほぼ平坦面である。

埋土は、Ａ層から成りＡ$_1$、Ａ$_2$層に細分される。Ａ$_1$層、Ａ$_2$層ともに暗褐色土を基本とするもので固さ、しまりともに欠く。Ａ$_1$層の方には、褐色～黄褐色土が粒状に混入するものである。

埋土中より第27図21、22、33が出土している。21は、口縁部の破片であるが、縦回転のＲＬ斜縄文を施文するだけのものである。胎土は、ち密で焼成も良好で、内面は丁寧に調整されている。22も口縁片であるが、口縁が薄くなりそのままぬける。小破片で不明だが、縄文のみの施文である。33は底部片で底面に木葉痕が認められる。



第23図　第５号、６号土壙跡



第24図　Dトレンチ西側小ピット群

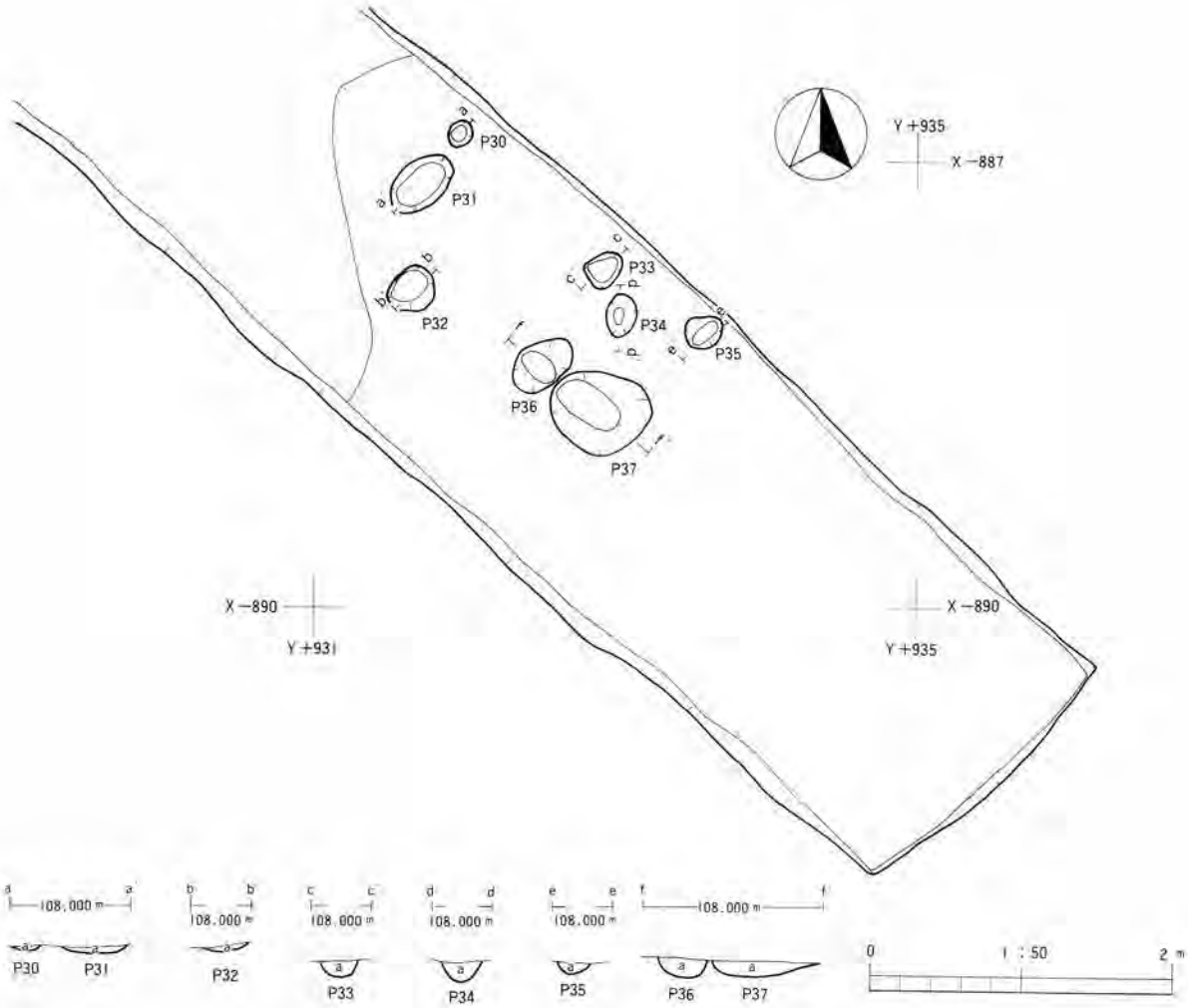
第６号土壙跡（第23図）

第５号土壙跡の南側に検出した。南半分は調査区外（現道により破壊）で不明。

長軸方向で1.2m、短軸方向で0.5m以上をはかるもので、楕円形状のプランを呈するものと推定される。検出面からの深さは、 0.1mと浅い皿状の土壙跡である。

埋土は、暗褐色～褐色の土を基本とするもので固さ、しまりともに欠く。

出土遺物はなかった。



第25図　Ｄトレンチ東側小ピット群

第２号竪穴跡（第26図　写真図版）

Ｄトレンチの中央部やや西偏する位置の道路側に基本層序Ⅲ層の下、地山面上に検出した。大半の部分が調査区外の道路下にあり全容は不明である。

規模　検出した部分で規模は、東西方向11.8m、南北方向1.0m以上をはかるものである。検出面からの深さは、最も深い西壁側で0.25mをはかる。

埋土　埋土は、Ａ層から成りＡ$_1$～Ａ$_3$層に細分される。Ａ$_1$層は、中央部付近に薄く堆積するもので、暗褐色土を基本とする。基本層序Ⅲ層の旧耕作土層と似かよっているが、固さ、しまりの点で区別される。Ａ$_2$層は、当竪穴のほぼ全域に堆積するもので、やや暗い暗褐色土から黒褐色土に近かい土を基本とする。固くしまっており、明るい褐色土が粒塊状に混入する。Ａ$_3$層は、壁沿いに巡る周溝状の落ち込み部分に堆積するもので、やや明るくなる暗褐色土を基本とする。やはり固くしまっており、Ａ$_2$層程ではないが、褐色土の混入が認められる。

床面　床面は、ほぼ平坦な地山面で西端から東端へかけてゆるやかに傾斜している。

床面上では、壁沿いに下場径で0.1～0.15mをはかる周溝状の落ち込みが確認された。この落ち込みは、深いところでも床面からせいぜい0.1m弱なものである。床面上では、これ以外の柱穴状のピットなど他の施設は確認できなかった。

埋土中からの出土遺物は確認されなかった。

小ピット群（第22図～27図　第１表）

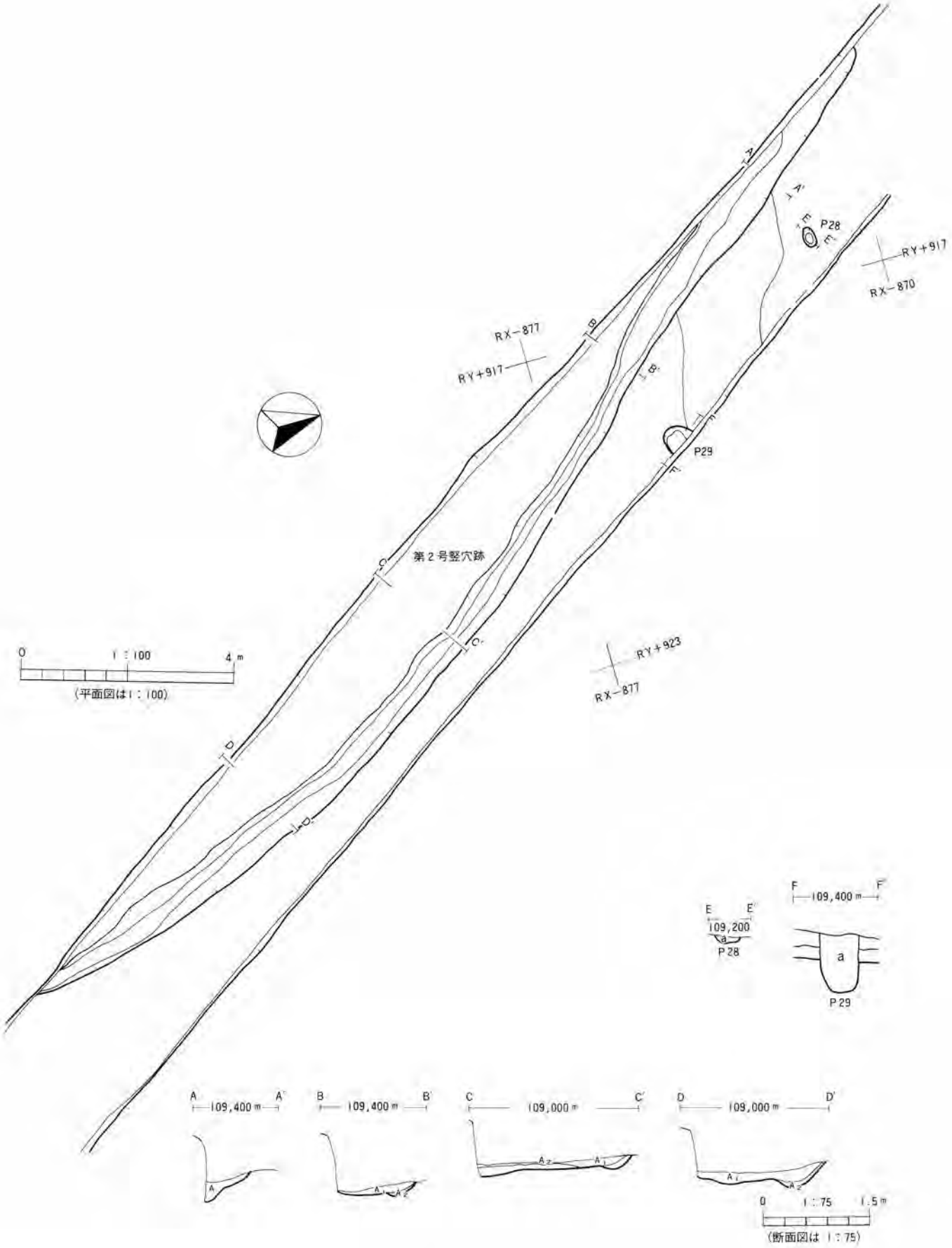
Ａトレンチから Ｄトレンチにかけて柱穴様の小ピット37口を検出したが、形状・規模などの一覧表を付すことで個々についての詳述は省略する。

これらの中には、攪乱によると思われるピットもある。検出状況としては、Ａトレンチの第５号、６号土壙跡周辺、Ｄトレンチ西端部と東端に集中しているが、調査区幅が狭く全容を把握することができなかった。従って、本来的には竪穴住居跡などに伴なったものなのか、掘立柱建物跡を構成するものなのか、その性格については不明である。

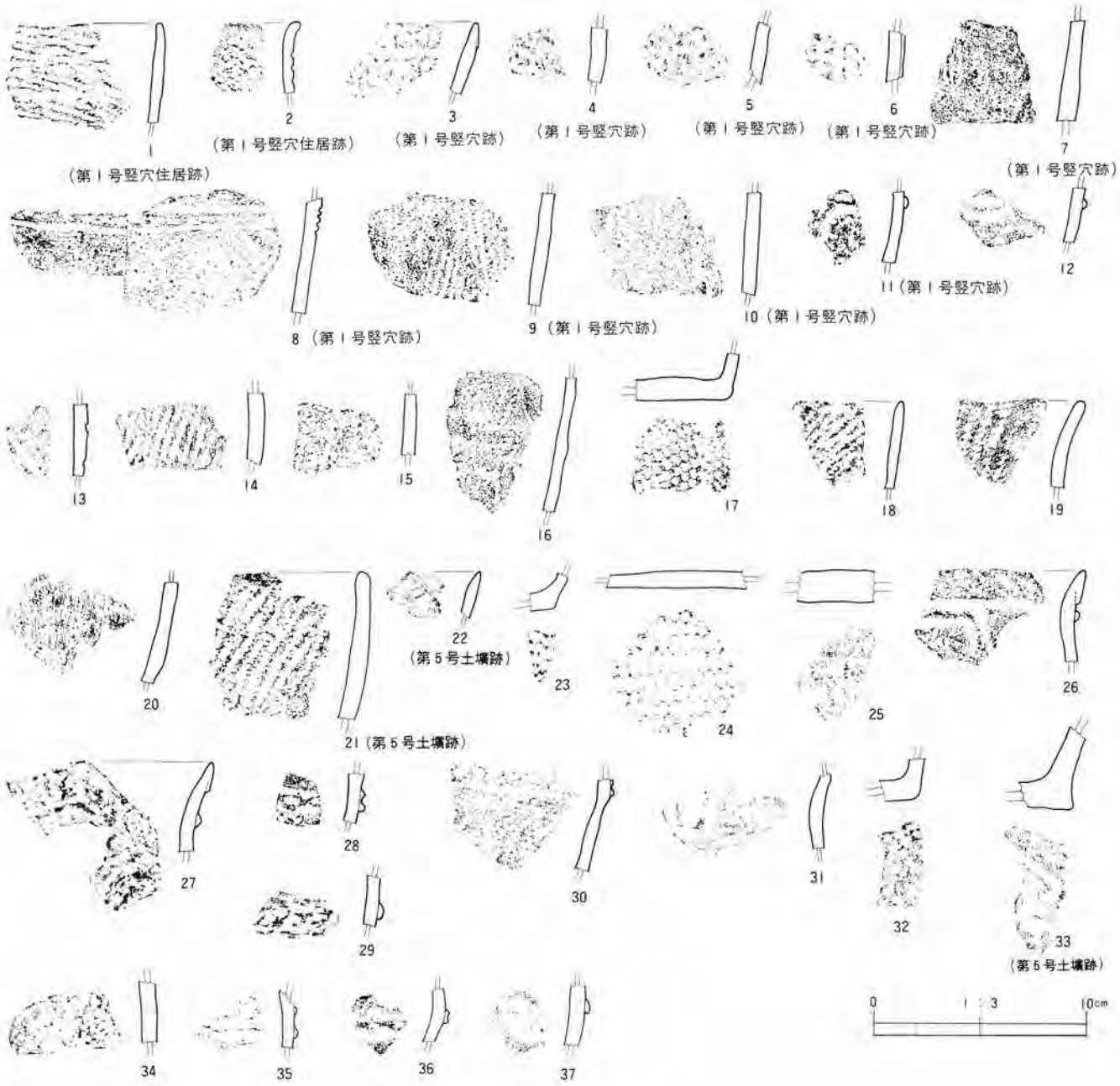
なお、埋土中から遺物等が確認されるものは、ほとんどなかった。あっても、土器の小片程度で図示できるものではない。

No.	形状	規模（m）	深さ
Ｐ１	円形	0.20×0.18	0.17
Ｐ２	だ円形	0.20×0.15	0.11
Ｐ３	だ円形	0.22×0.10	0.14
Ｐ４	だ円形	0.20×0.15	0.23
Ｐ５	だ円形	0.30×0.21	0.28
Ｐ６	円形	0.25×0.21	0.04
Ｐ７	だ円形	0.43×(0.29)	0.14
Ｐ８	だ円形	0.24×0.15	0.21
Ｐ９	だ円形	(0.31)×0.20	0.15
Ｐ10	円形	0.22×0.21	0.09
Ｐ11	円形	0.14×0.12	0.16
Ｐ12	だ円形	0.36×0.33	0.26
Ｐ13	だ円形	0.27×0.21	0.11
Ｐ14	だ円形	0.48×(0.19)	0.16
Ｐ15	だ円形	0.27×0.24	0.24
Ｐ16	だ円形	0.46×(0.41)	0.15
Ｐ17	だ円形	0.20×0.13	0.12
Ｐ18	円形	0.15×0.14	0.09
Ｐ19	だ円形	0.23×0.14	0.12
Ｐ20	だ円形	0.50×0.30	0.12
Ｐ21	だ円形	0.21×0.19	0.07
Ｐ22	だ円形	0.25×0.20	0.20
Ｐ23	だ円形	0.25×0.23	0.11
Ｐ24	だ円形	0.35×(0.32)	0.14
Ｐ25	だ円形	0.20×0.12	0.10
Ｐ26	だ円形	0.45×0.29	0.12
Ｐ27	だ円形	0.35×0.25	0.15
Ｐ28	だ円形	0.18×0.12	0.06
Ｐ29	だ円形	0.26×(0.20)	0.52
Ｐ30	円形	0.18×0.16	0.03
Ｐ31	だ円形	0.47×0.30	0.04
Ｐ32	だ円形	0.32×0.28	0.03
Ｐ33	だ円形	0.26×0.20	0.10
Ｐ34	だ円形	0.27×0.20	0.12
Ｐ35	だ円形	0.26×0.22	0.07
Ｐ36	だ円形	0.44×0.30	0.12
Ｐ37	だ円形	0.63×0.54	0.10

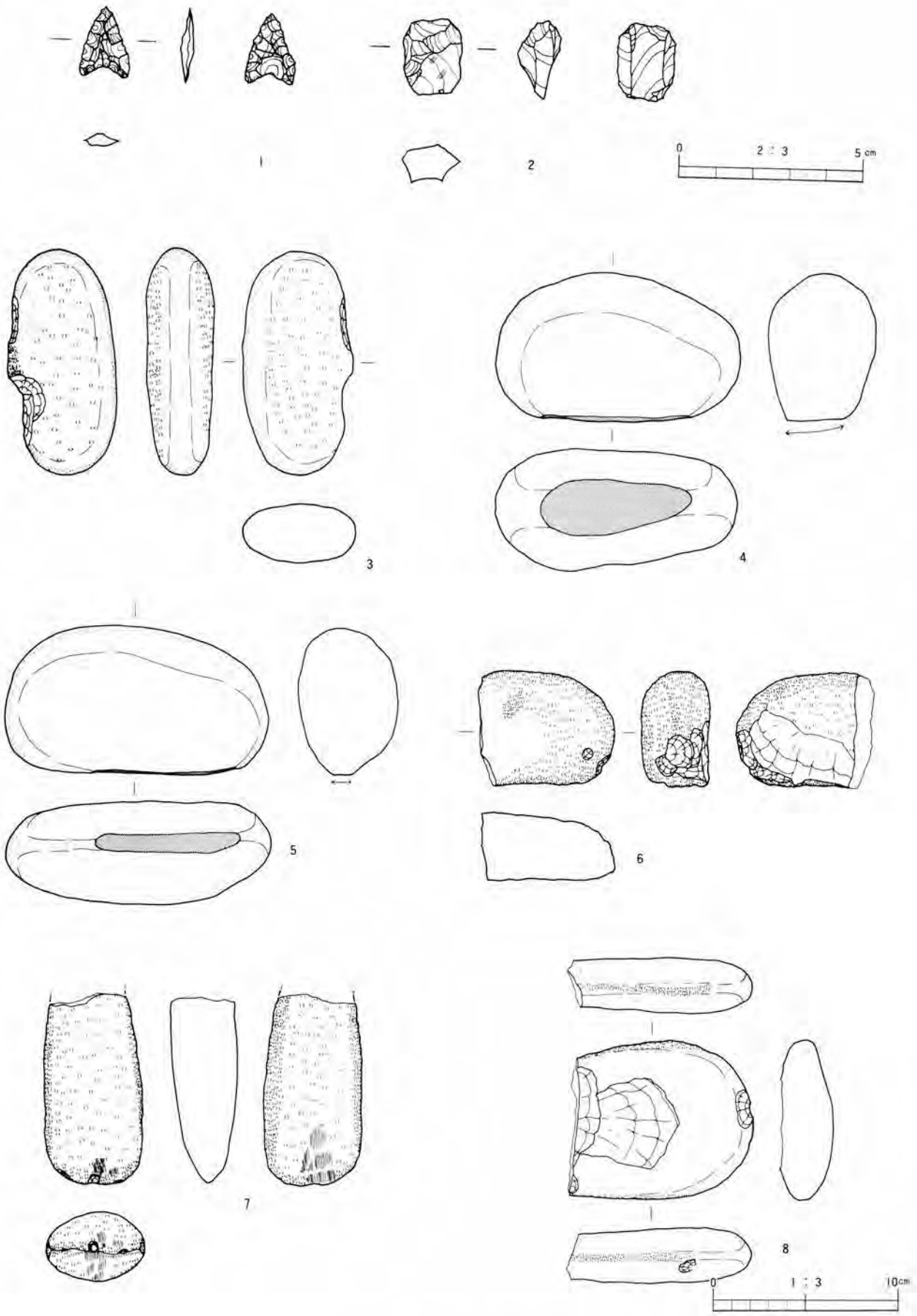
第２表　小ピット群計測値一覧表


RX−877
RY+917
RY+917
RX−870
P28
P29
第２号竪穴跡
RY+923
RX−877
0
1：100
4 m
（平面図は1：100）
E
E'
109,200
a
P28
F
F'
109,400 m
a
P29
A
A'
109,400 m
B
B'
109,400 m
C
C'
109,000 m
D
D'
109,000 m
0
1：75
1.5 m
（断面図は 1：75）

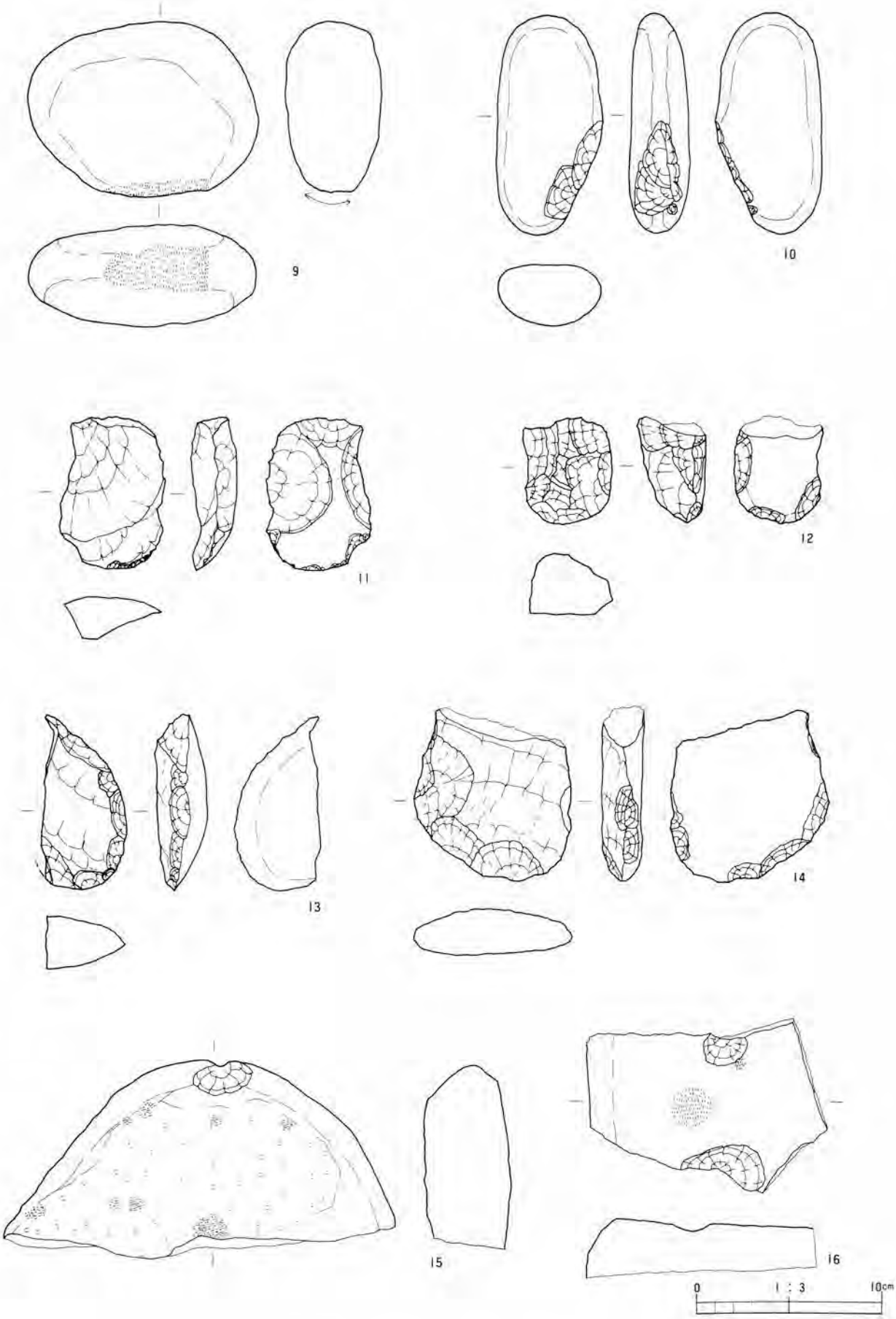
第26図　第２号竪穴跡


1
（第１号竪穴住居跡）
2
（第１号竪穴住居跡）
3
（第１号竪穴跡）
4
（第１号竪穴跡）
5
（第１号竪穴跡）
6
（第１号竪穴跡）
7
（第１号竪穴跡）
8（第１号竪穴跡）
9（第１号竪穴跡）
10（第１号竪穴跡）
11（第１号竪穴跡）
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21（第５号土壙跡）
22
（第５号土壙跡）
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
（第５号土壙跡）
34
35
36
37
0
1
3
10cm

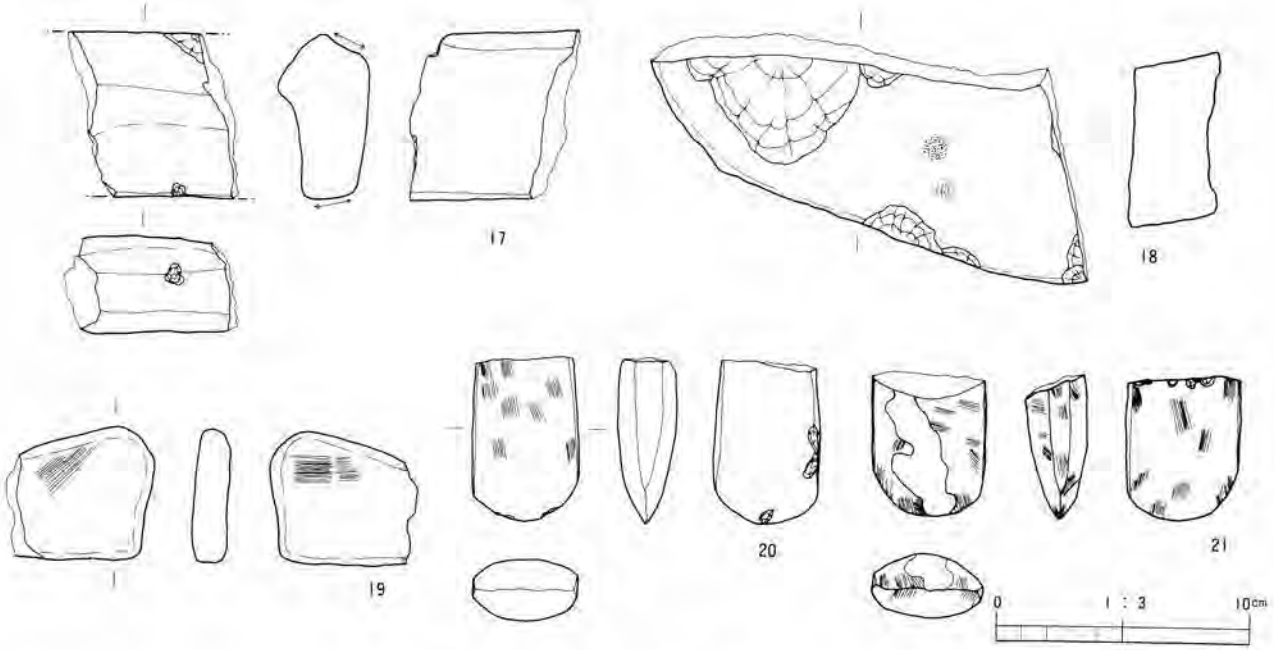
第27図　出土遺物（土器）



第28図　出土遺物　石器①



第29図　遺構外出土遺物　石器②



第30図　出土遺物　石器③

遺構外出土遺物（第27図～第30図）

基本層序Ⅰ層、Ⅲ層から遺物が出土している。

第27図12～20、23～32、34～37が遺構外から出土した土器である。いずれも小破片で全体の形状（器形や文様構成など）を把握できるものはない。12は、断面三角形状に調整された隆線により施文されている。13は、刺突列と沈線により文様が施文されている。14～16、18～19は縄文以外に文様要素が認められない。20は、擦痕状の沈線が認められるもの。26～31、34～37は、隆線により文様が施文されるものである。26、27は口縁部の破片で、27は波状口縁となるものである。どちらも口縁部上端に斜縄文を施文した隆帯が付く複合口縁となっている。28～29は、隆線上に刺突列が施文されている。17、23～25は底部片で、17、23、24には網代痕が、25には木葉痕がそれぞれ底面に認められる。 **土器**

以上の土器片は、縄文主体のものについては不明だが、大むね縄文時代後期に伴なうものと考えられる。 **縄文時代後期**

次に石器だが、第28図１～第30図21までが今次調査で出土したものである。

第28図１は、基部が凹基となる石鏃である。両面ともに第１次剥離面を残さず細かい調整剥離される三角形鏃となる。２は、ピエス・エスキーユ状の形態を有す不整形を呈す剥片であるが打撃により生じる剥離のリングが異なり、ピエス・エスキーユと認定できない。３以下は、礫を利用した礫石器類。３は、一方の側縁部に敲打によると思われる剥離が伴なう敲石。楕円形状を呈するもので表裏の平坦面にも敲打痕が認められる。４は第２号竪穴住居跡から出土したもの。５は、敲打磨石で下端部に幅１㎝程の磨面が認められる。６は、一部に自然面を残すがほぼ全面に敲打痕が認められる。７は、磨製石斧で研磨作業の工程に達しなかったものと考えられ全面に整形時の調整痕（敲打痕）を残す。刃部付近に擦痕と細かい剥離がみられるが、石器加工段階のものなのか、使用によるものなのかは明確でない。７、８は、側縁部に敲打痕 **石器**

が認められるもの。10は、側縁の一部に剥離を残すだけのもので詳細は不明。11～14は、打製石斧、いずれも背面に大きく自然面を残すものである。15、16、18は、石皿と思われ、いずれも機能面に敲打痕による凹み部分が認められる。17は、特殊磨石で上・下端に幅1.5cm程度の磨面（A面）を有し片側にだけ調整磨面（B面）が伴う。B面は、かなり深い磨面で砥石として転用された可能性も考えられる。19は、表裏両面の一部にだけ擦痕が認められるもの。20、21は、全面を研磨仕上げした磨製石斧でいずれも基部を欠く。

図版番号－No.	出土地点　層位	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
第28図－1	Bトレンチ　Ⅰ層	石ぞく	2.0	1.3	0.3	0.5
第28図－2	Dトレンチ　Ⅰ層	剥　片	2.1	1.6	1.0	3.6
第28図－3	Dトレンチ　Ⅰ層	敲　石	12.3	5.9	3.2	374.4
第28図－4	第1号竪穴住居跡	敲打磨石	13.2	8.0	5.8	1016.3
第28図－5	Cトレンチ　Ⅰ層	敲打磨石	14.2	8.0	5.4	1038.2
第28図－6	Dトレンチ　Ⅲ層	敲　石	(7.3)	6.2	3.7	(232.0)
第28図－7	Cトレンチ　Ⅲ層	石　斧	(10.4)	5.3	3.5	(327.3)
第28図－8	Dトレンチ　Ⅲ層	敲　石	(10.0)	8.6	2.8	(341.0)
第29図－9	Cトレンチ　Ⅰ層	敲　石	12.5	9.5	5.2	948.3
第29図－10	Cトレンチ　Ⅲ層	敲石？	12.0	5.7	3.3	416.1
第29図－11	Dトレンチ　Ⅲ層	打製石斧	8.2	5.3	2.3	105.8
第29図－12	Dトレンチ　Ⅲ層	打製石斧	(5.8)	4.8	3.4	(129.9)
第29図－13	Dトレンチ　Ⅲ層	打製石斧	(9.6)	(4.6)	2.9	(146.3)
第29図－14	Cトレンチ　Ⅰ層	打製石斧	(9.5)	8.7	2.5	(288.0)
第29図－15	Cトレンチ　Ⅲ層	石　皿	(21.2)	(10.5)	4.6	(1279.1)
第29図－16	Aトレンチ　Ⅰ層	凹石？	(9.5)	(12.5)	3.0	(445.8)
第30図－17	Dトレンチ　Ⅰ層	敲打磨石	(6.9)	(6.5)	3.6	(206.8)
第30図－18	Cトレンチ　Ⅲ層	石　皿	(17.2)	(8.5)	3.4	(626.2)
第30図－19	Cトレンチ　Ⅲ層		(5.7)	(5.4)	1.4	(70.6)
第30図－20	Cトレンチ　Ⅲ層	磨製石斧	(6.6)	(4.2)	2.4	(109.0)
第30図－21	Dトレンチ　Ⅲ層	磨製石斧	(5.7)	(4.5)	2.5	(98.2)

第3表　出土石器計測値一覧表

扁平円礫について

『崎山遺跡群Ⅳ、Ⅴ』の中で高橋は、遺跡より出土する円形から楕円形を呈する自然石について様々な論考を行なっており、今回の調査でも数量的には少ないが出土しているので、高橋の論に従って分析する。

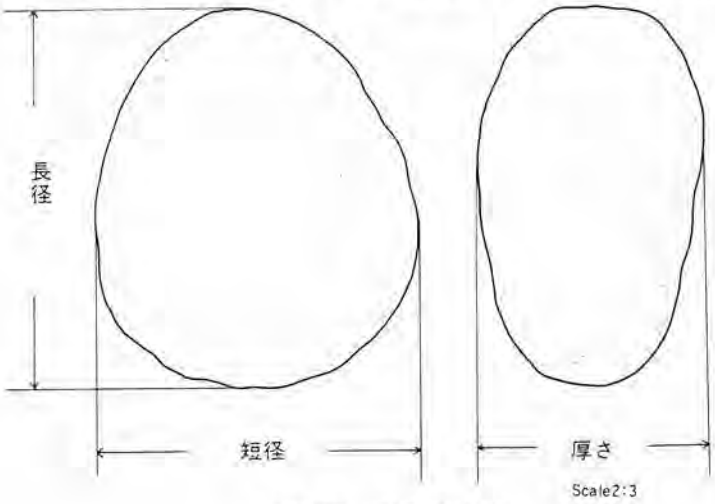
まず、この様な自然石（浜石）を扁平円礫と呼称するが、その定義は「海岸に自然状態に存在する浜石と区別するため」とある。その特徴としては、前述の様な形状を呈し使用痕、加工痕、調整痕などの痕跡が認められない。石材としては、花崗岩系と安山岩系統の２種類が中心で表皮は極めて平滑で、風化しているものはなく、ややち密で硬質である。

高橋は、白石遺跡第３次調査時の第10号竪穴住居跡床面上の一括した出土状況に着目し、遺跡から出土する扁平円礫について重量と長径による図化による分析を試みている。その結果、Ａ～Ｄの４つのグループに分けられ、ある一定の規格のもとに複数の目的で遺跡内に持ち込まれたと想定し、具体的にその使用状態などについて言及している。

つまり、最も小規格なＡグループについては切目石錘や小形の礫石錘同様に漁網錘として、また、Ｂ～Ｄの大形のグループについては、漁撈に関する錘としての用途と礫石器の素材や炉石などの遺構を構成する材料として持ち込まれた可能性を想定している。

さて、以上の様な視点から今回の大付第７次調査より出土した扁平円礫について同様の手法で分析をしてみる。ただし、今次調査では遺構数が少ないため分析の対象となる円礫は少なくむしろ、表土（Ⅰ層）及び旧耕作土（Ⅲ層）中から比較的多量に出土しており、厳密に言えば時期的な問題を無視した格好となり、高橋の意図するものとは異なるが、『崎山遺跡群Ⅳ』にも記している通り、自然状態では海岸以外には存在しないものであることや表土とは言えほとんど地山面上であること、人為的に堆積されたⅡ層中からは１点も出土していないことなどを考え合わせ分析の対象とした。なお、大付第６次調査においても10数点であるが出土しており未分析であったため、今回、その分析結果を併せて掲載しておく。

その結果は、第32図（大付第６次）、第33図（大付第７次）のとおりである。大付第６次では、重量が 100ｇ未満で長径が５cm以下の一群のＡグループ、重量が100～200ｇで長径が６～７cmに分布する一群のＢグループに分けられる。分析対象資料点数が極端に少ないため、明確ではないが、Ｃ、Ｄグループを欠いている。ただし、Ｃ、Ｄグループに属すると思われる位置に２点あるのでこれでひとつのグループとして分類できる可能性は否定できない。



第31図　扁平円礫図

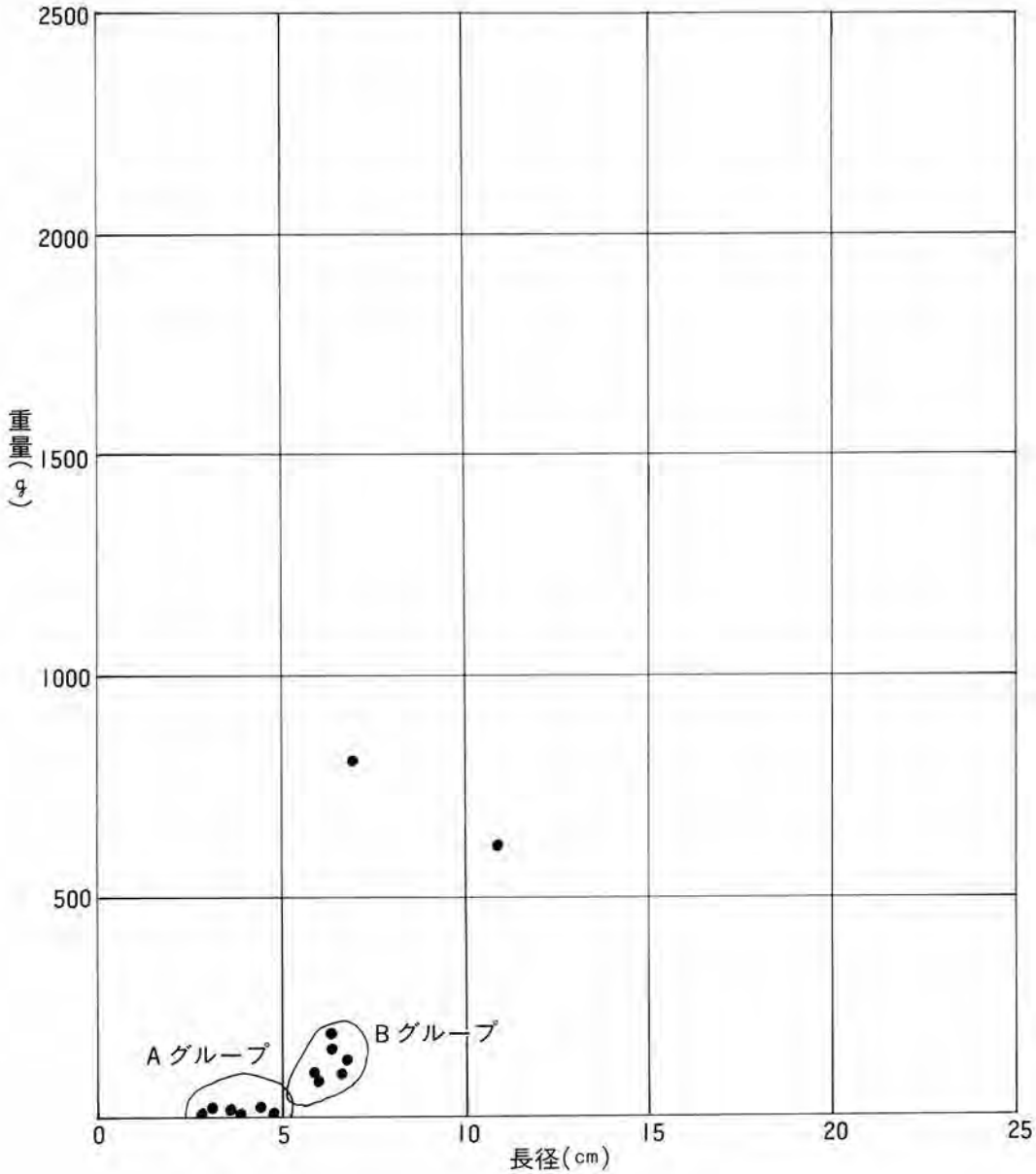
大付７次では、Ａ～Ｄの４つのグループに分類できた。結果的には、白石遺跡や崎山貝塚などの分析結果と同じとなった。

Ａグループは、重量100ｇ、長径が６cm未満の一群である。Ｂグループは、重量100～200ｇ、長径６～８cmを中心に分析する一群。

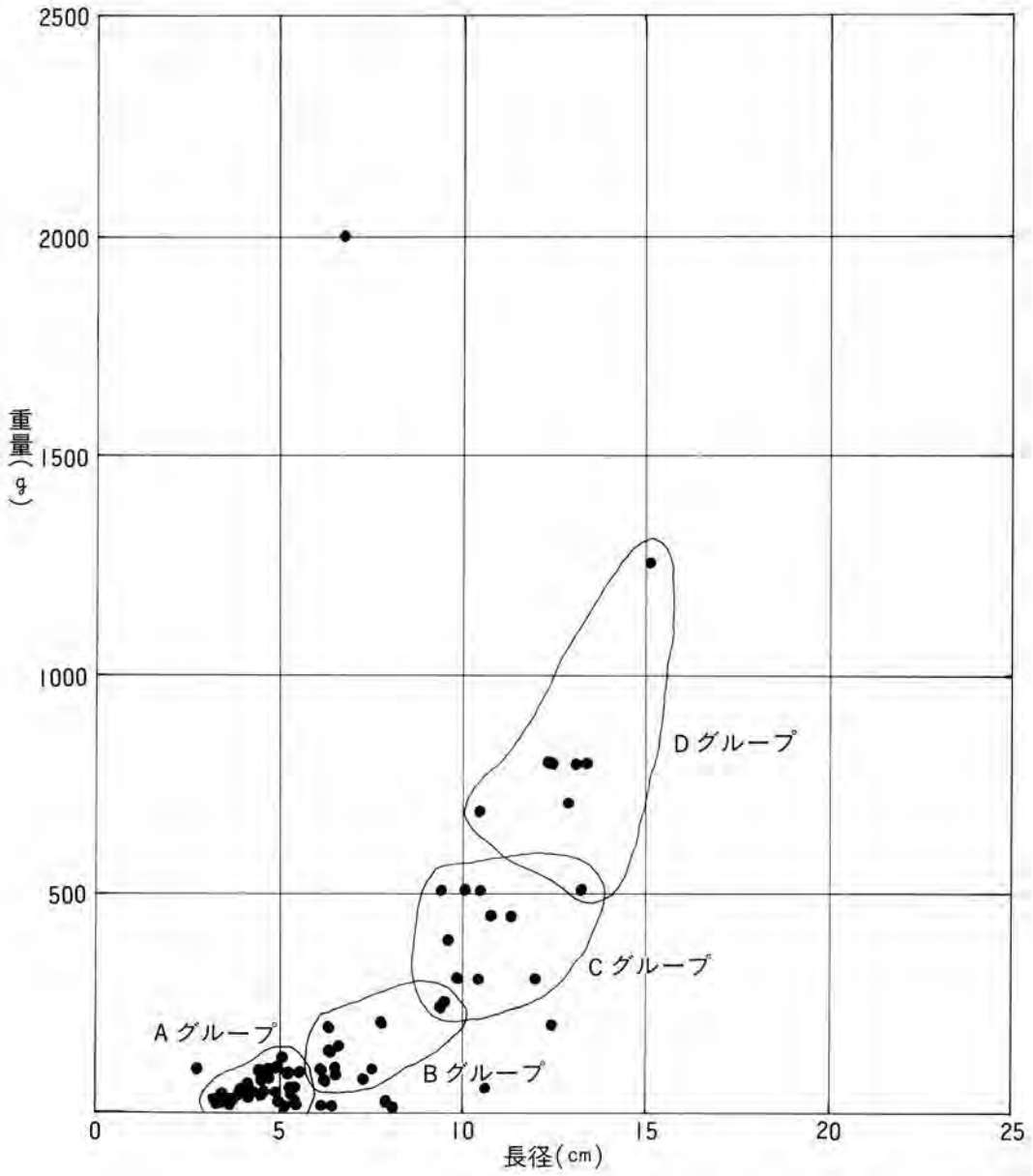
Cグループは、重量300～500ｇ、長径10～12cmを中心とする一群である。Dグループは、重量800ｇ、長径13cmを中心とする一群である。

No	出土地点　層位	長さ	幅	厚さ	重量
1	Dトレンチ　Ⅲ層	15.2	10.1	5.6	1260
2	Dトレンチ　Ⅲ層	7	6.3	3.5	2001
3	Cトレンチ　Ⅲ層	13.2	9.7	5.5	800
4	Cトレンチ　Ⅲ層	9.9	7.1	2.9	303
5	Cトレンチ　Ⅲ層	12	5.9	2.8	301
6	Cトレンチ　Ⅲ層	10.5	7.1	2.8	300
7	第1号竪穴住居跡	5.2	4.5	4.1	130
8	第1号竪穴住居跡	3.1	2.5	1.6	100
9	Dトレンチ　Ⅲ層	6.4	5	3.7	190
10	Dトレンチ　Ⅲ層	6.7	5.7	3	150
11	Dトレンチ　Ⅲ層	5.5	4.9	2.2	90
12	Cトレンチ　Ⅲ層	4	3.4	2.7	50
13	Cトレンチ　Ⅲ層	7.4	2.8	2.1	70
14	Cトレンチ　Ⅲ層	5	2.8	1.6	30
15	Cトレンチ　Ⅲ層	11.4	7.2	3.8	450
16	Cトレンチ　Ⅲ層	12.5	5	2.2	200
17	Cトレンチ　Ⅲ層	4.3	3.5	1.7	40
18	第5号土壙跡埋土	13.5	9.6	5	800
19	第5号土壙跡埋土	10.5	8.2	5.1	690
20	Dトレンチ　Ⅲ層	12.5	9.5	6	800
21	Dトレンチ　Ⅲ層	3.9	2.9	1.3	20
22	Dトレンチ　Ⅲ層	3.7	3.4	2	40
23	Cトレンチ　Ⅲ層	12.4	10.2	5.7	800
24	Cトレンチ　Ⅲ層	13	8.2	5.1	708
25	Cトレンチ　Ⅲ層	13.3	7.5	5.1	507
26	Cトレンチ　Ⅲ層	9.7	7.7	5.5	504
27	Cトレンチ　Ⅲ層	10.6	7	4	450
28	Cトレンチ　Ⅲ層	5.5	5	3.2	103
29	Cトレンチ　Ⅲ層	4.5	4	3.6	100
30	Bトレンチ　Ⅰ層	10.7	5.9	5.7	507
31	Bトレンチ　Ⅰ層	5.2	4.8	4.5	107
32	Bトレンチ　Ⅰ層	4.7	4.3	4.1	100
33	Bトレンチ　Ⅰ層	5.3	3.6	1.7	50
34	Bトレンチ　Ⅰ層	4.6	3.2	1.5	30
35	Bトレンチ　Ⅰ層	3.2	3	2	30
36	Bトレンチ　Ⅰ層	3.2	2.7	1.7	20
37	第2号竪穴跡A層	4.8	4.1	3	80
38	第2号竪穴跡A層	6.3	4	2.3	80
39	第2号竪穴跡A層	3.7	2.6	2.4	30
40	第2号竪穴跡A層	3.3	2.1	2.4	20
41	Dトレンチ　Ⅲ層	8.2	0.6	2.1	10
42	Dトレンチ　Ⅲ層	4.6	4.3	2.3	80
43	Dトレンチ　Ⅲ層	6.5	5.2	2.4	103
44	Dトレンチ　Ⅲ層	5.6	5	2.2	90
45	Dトレンチ　Ⅲ層	5	4	3.8	100
46	Dトレンチ　Ⅲ層	6.2	4.4	3.5	102
47	Dトレンチ　Ⅲ層	5.2	3.5	2.5	70
48	Dトレンチ　Ⅲ層	4.9	3.5	2	50
49	Dトレンチ　Ⅲ層	4.2	3.4	2	50
50	Dトレンチ　Ⅲ層	3.7	2.9	1.7	30
51	Dトレンチ　Ⅲ層	8	7.2	3.5	290
52	Dトレンチ　Ⅲ層	5.1	4.8	3.7	103
53	Dトレンチ　Ⅲ層	6.6	4.7	2	100
54	Dトレンチ　Ⅲ層	7.8	5.1	3.1	200
55	Dトレンチ　Ⅲ層	5.1	4.2	1.8	50
56	Dトレンチ　Ⅲ層	4.2	4	3.7	80
57	Dトレンチ　Ⅲ層	3.5	2.9	2.3	30
58	Aトレンチ　Ⅲ層	9.4	5.6	3.4	240
59	Aトレンチ　Ⅲ層	4	3.7	1.5	40
60	Aトレンチ　Ⅲ層	3.5	2.8	1.7	20
61	Aトレンチ　Ⅲ層	3.4	2.9	1.3	20
62	Aトレンチ　Ⅰ層	10.3	8.1	5	507
63	Aトレンチ　Ⅰ層	10.5	7.9	4.4	500
64	Aトレンチ　Ⅰ層	6.6	5.5	1.5	90
65	Aトレンチ　Ⅰ層	5.3	4.4	2.9	90
66	Aトレンチ　Ⅰ層	3.5	3.6	2.5	50
67	Dトレンチ　Ⅰ層	9.7	7.5	3.7	390
68	Dトレンチ　Ⅰ層	9.5	6.7	2.7	250
69	Dトレンチ　Ⅰ層	7.6	4.1	2.2	100
70	Dトレンチ　Ⅰ層	6.4	5.6	2.8	140
71	Dトレンチ　Ⅰ層	5	4	1.9	50
72	Dトレンチ　Ⅰ層	5.9	3.4	1.7	50
73	Dトレンチ　Ⅰ層	5.9	5	2.3	100
74	Dトレンチ　Ⅰ層	5.3	3.9	1.6	50
75	Dトレンチ　Ⅲ層	6.2	5.3	2.4	100
76	Dトレンチ　Ⅲ層	4.9	4.1	1.8	50
77	Dトレンチ　Ⅲ層	5	3.9	1.7	50
78	Dトレンチ　Ⅲ層	4.7	3	1.5	30
79	Dトレンチ　Ⅲ層	4.5	3.2	2.2	50
80	Dトレンチ　Ⅲ層	4.1	4	1.5	40
81	Dトレンチ　Ⅲ層	4.3	4.1	2.3	50

第4表　大付7次調査扁平円礫計測値一覧表



第32図　大付第6次調査扁平円礫



第33図　大付第７次調査扁平円礫

Ⅲ　調査のまとめ

今回の第７次調査は、道路拡幅部分のみの調査であり、とても全体を把握するまでには行けなかったが、過去６次にわたり実施されて来た大付遺跡の概略のまとめと遺跡の広がりを考える上では非常に良い機会になったものと思っている。また、過去未報告であった昭和63年度の白石遺跡の発掘調査も併せて報告ということになったが、これは前述の遺跡の範囲をある程度確定させるものであったので今回の報告書に掲載した。以下、第７次調査となった今回の調査について若干の考察を混じえまとめとする。

1　検出した遺構について

竪穴住居跡１棟、竪穴跡２棟のほか土壙跡や柱穴状の小ピットを検出したが、竪穴住居跡、竪穴跡についてはいずれも全体を検出できなかった。特に第２号竪穴跡とした所は、規模的には大きなもので、今回はそのほんの一部分で大部分は道路下に伸びている。

第１号竪穴住居跡

調査区Ａトレンチ内で検出した第１号竪穴住居跡は、南半部分がすでに破壊消滅しており、全容を把握することはできなかったが、ほぼ円形プランを呈するものであった。大付第１次調査においても同様なプランと地床炉を有す竪穴住居跡を調査しているが（『大付報文79』）、今回は、それに次いで大付遺跡では２例目となる。

さて、今回検出した竪穴住居跡は、床面から直接出土した土器がなく不明確である。薄い埋土中より出土した数点の土器片（第27図１、２）も縄文主体のもので、明確に時期を特定できない。周辺の土壙跡や遺構外からは、本文にも記した通り縄文時代後期に所属する様相を呈する土器が出土しており、当該住居跡はもこの頃の時期と考えられる。

第２号竪穴跡

次に竪穴跡だが、特に第２号竪穴跡は規模も大きいものであったが、わずかな調査面積のためその全容は把握できなかった。また、埋土中からの出土遺物もなく時期も特定できなかった。

土壙跡及び柱穴状の小ピット群も、竪穴住居同様である。

2　検出した遺物について

土器、石器も含め、出土量自体は少ない。また、土器などは、図示可能なものが少なく小破片や縄文主体のもの、摩滅したものが多かった。図示できた土器片は、本文中にも記した通り縄文時代後期に所属するものと考えられる。

縄文時代後期

石器は、礫石器類が多く敲打磨石、敲石のほか、背面に自然面を残す打製石斧などが出土している程度である。

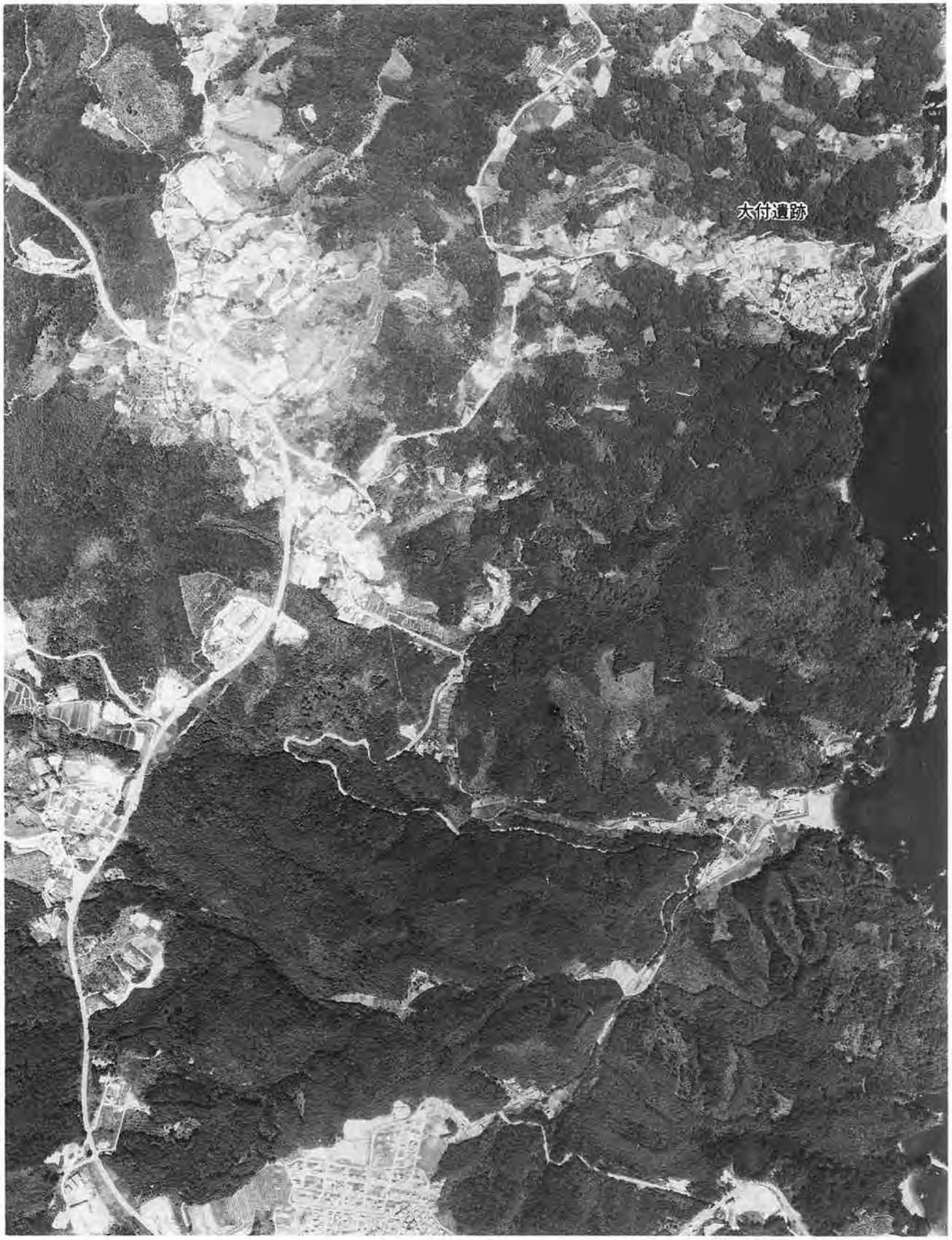
扁平円礫については、81点について分析し併せて大付第６次調査の分析結果も掲載したが、幾つかにグルーピングできる様だが、これは、今後の検討課題としてどの様な遺跡から検出するのかという遺跡間の比較や遺跡での出土状況等の再吟味などまだまだ検討しなければならない点が多いと考えられる。

3　調査のまとめ

今回の第７次調査の結果は、以上の通りであるが、調査面積が道路の拡幅部分だけという極めて限定された狭い範囲内での調査であったため、個々の遺構についてはもちろんだが、検出した遺構同士の関連など遺跡の性格までを把握できるものではなかったと思われる。しかし、本報告書を刊行するに際しては、今まで過去に為されて来た大付遺跡の発掘調査の成果の取りまとめをすることができた。また、漠然としていた大付遺跡の全体像（遺跡の範囲や中心部、貝塚としての大付遺跡など）を少しでもさぐることが出来たものと思う。

写　真　図　版

第１図版



崎 山 遺 跡 群

第 2 図版

第 7 次 調 査 区

第 7 次 調 査 区

第 7 次 調 査 区

第 7 次 調 査 区

第 4 図版

第 1 号竪穴住居跡（土層断面）①

第 1 号竪穴住居跡（土層断面）②

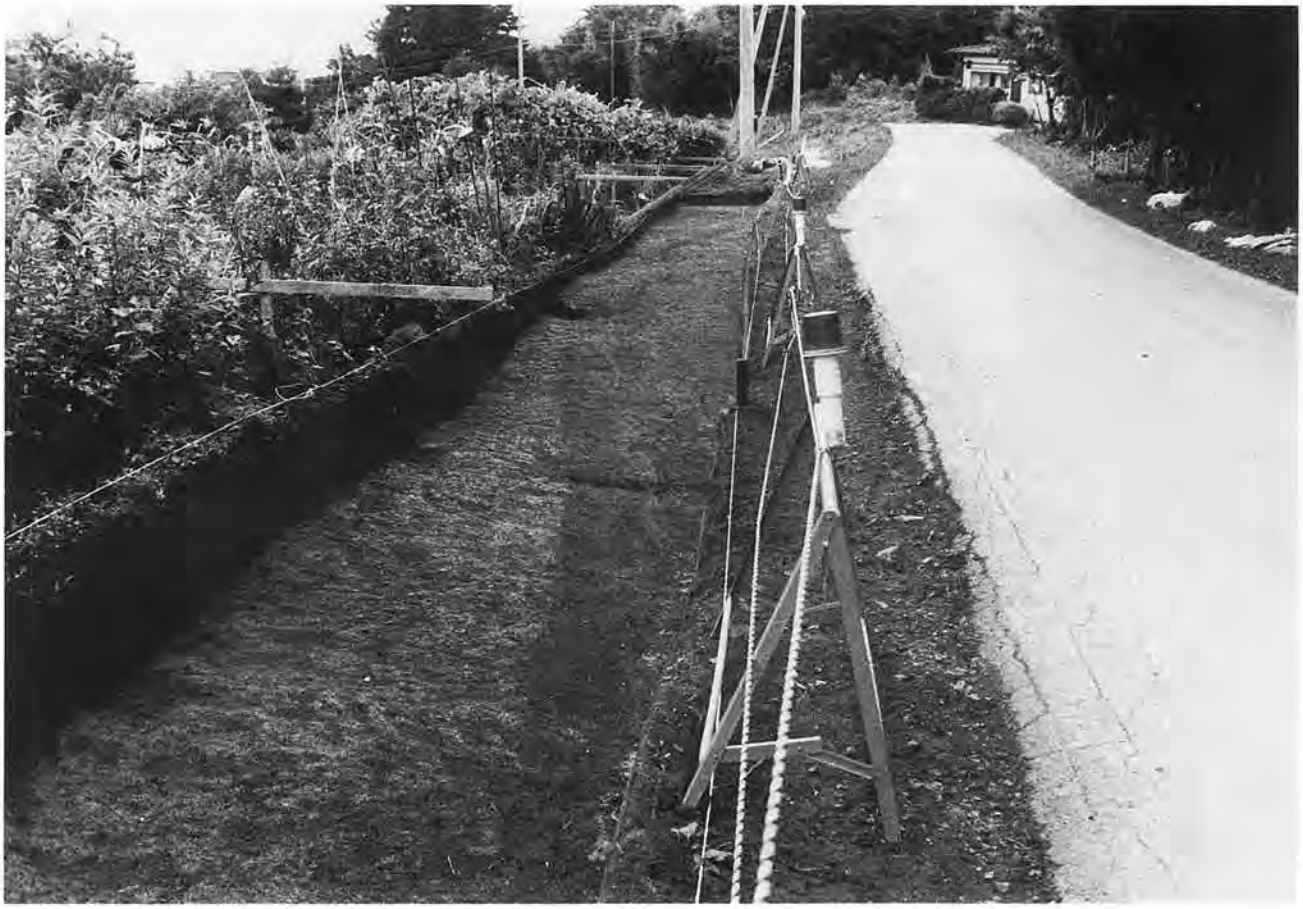
第 5 号土壙跡（完掘）

第 4 号土壙跡と第 1 号竪穴跡（土層断面）

第 6 図版

調査区Ａトレンチ遺構検出状況

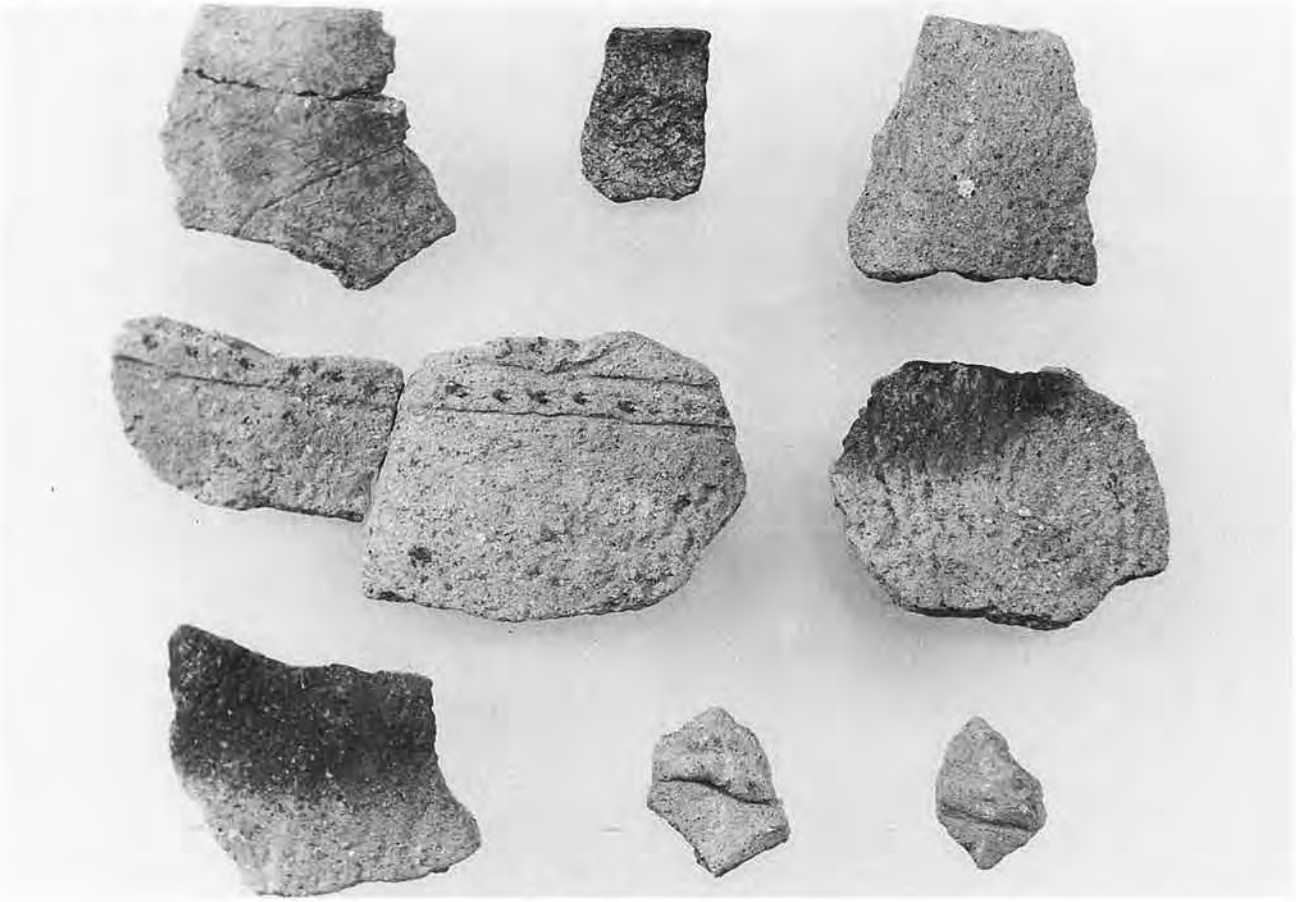
第１号竪穴住居跡



第 2 号竪穴跡（検出状況）

第 2 号竪穴跡（完掘）

第 8 図版



出 土 土 器 ② （第27図）

同 上 ② （第27図）

出 土 土 器 ③ （第27図）

第28図 1

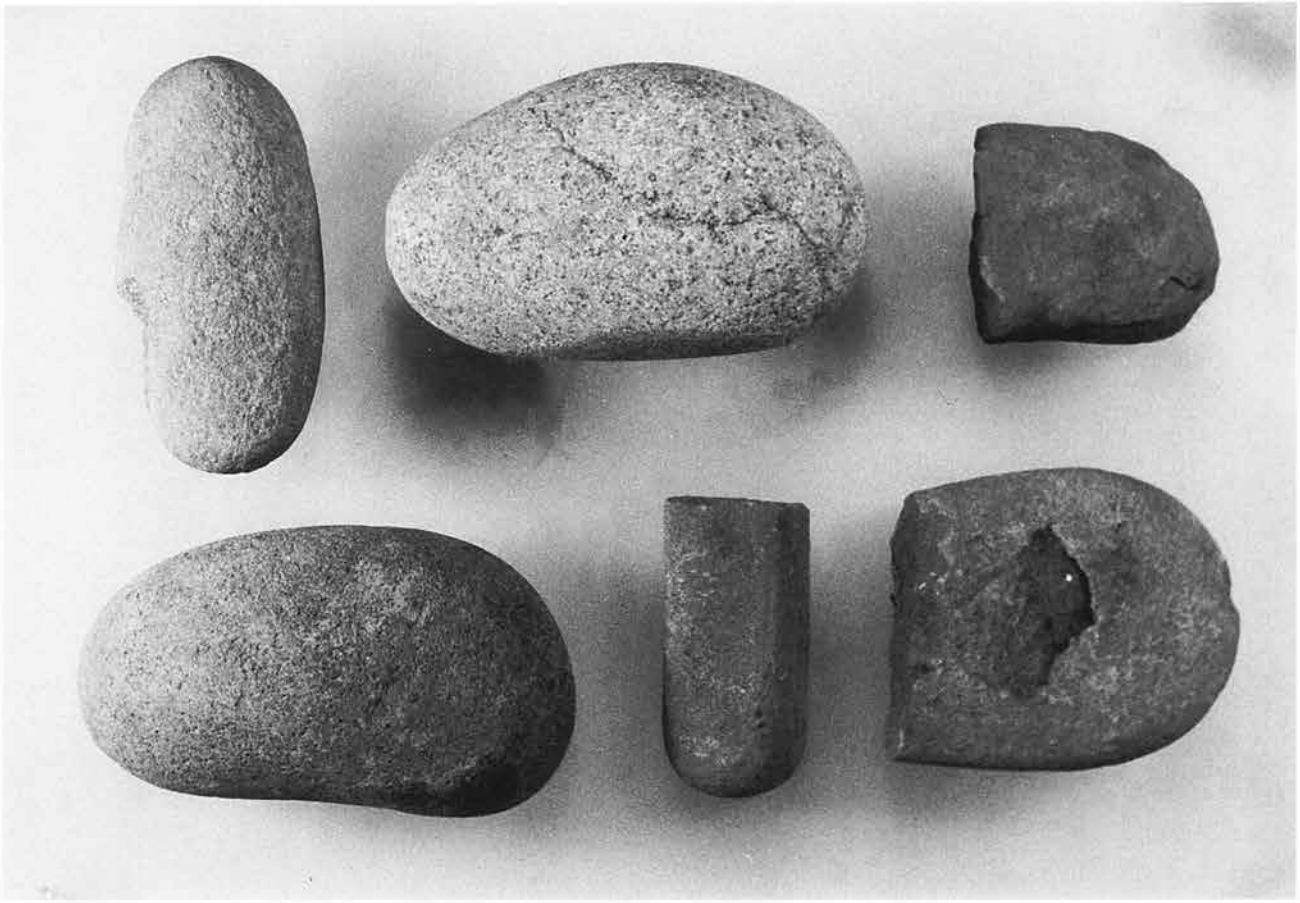
第30図 20

第30図 21

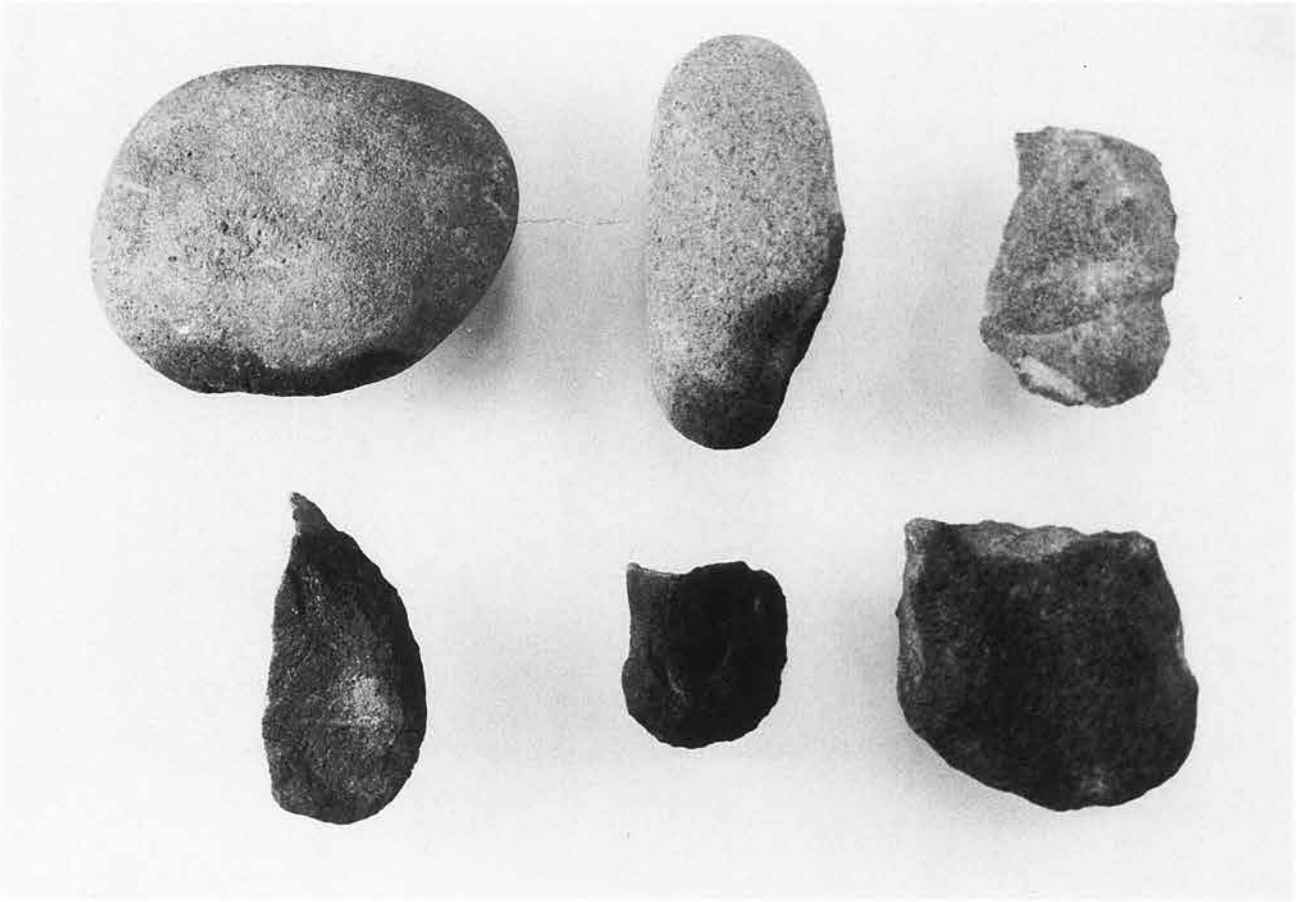
第28図 2

出 土 石 器 ①

第10図版



出 土 石 器 ② （第28図 3 ～ 8 ）



出 土 石 器 ③ （第28図 9 ～14）

出 土 石 器 ④ （第28図15、16、第30図17、18）

宮古市埋蔵文化財調査報告書35

大付遺跡

—平成３年度発掘調査報告書—

1992.3

発　行　　岩手県宮古市教育委員会
〒027 宮古市新川町２番１号
ＴＥＬ0193－62－2111

印　刷　　株式会社　文　化　印　刷
岩手県宮古市大通２丁目５の２